



最強TS転生者

シャルロット=リリーホワイトの

敗北

作・クマノミの実

画・カシワユ





プロローグ…最強TS転生者シャルロット||リリーホワイト現る!!

——とある一人の男の話をしよう。何の変哲もない男の話だ。

善人と言う訳では無く、しかし悪人という訳でも無い。

天才と言う訳では無く、しかし無能と言う訳でも無い。

そこそこの大学を出て、そこそこの仕事に就き、そこそこの暮らしを送っている。そんな何処にでもいる男である。

そんな平凡な男の、しかし他と異なる点を挙げるとするのなら、その心の底に隠れた一つの願望だろう。

その願望を説明するには、彼が中学生だった頃まで時を遡る必要がある。

彼がやはりどこにでも居る中学生であった頃。

世に数多いる中学生男子の例に漏れず、彼の心は性へのリビドーに溢れていた。

しかし悲しいかな彼女もおらず、危ない事に手を染める勇氣も無い彼の衝動の向かう

先は、ネットにて無料で見ることの出来るエッチな絵や小説が精々であった。

だが、そんな性活の中、彼は彼の人生を変えてしまう出会いを果たすこととなる。

その日、彼が手なりで選んだ夜のオカズは一つのエロ小説であった。

ジャンルはTS(女体化物)、不思議な力で美少女になってしまった元男がチヨメチヨメされるお話である。

彼にとっては初めて遭遇したジャンル。とりあえず、少しだけ読み進めた。

そして彼はTS物にドハマリ——しなかった。

寧ろ気持ち悪い、萎えた。と途中でブラバしその日は一度も射精する事なく終える始末。それどころか、それ以降、類似するジャンルは絶対に踏まない様に注意深く避ける様になったのだから、相当だろう。

普通に考えれば、トラウマに近い程にTS物を嫌いになったと考えるのが妥当だろうが……しかし真実は全くの逆であった。

彼は、ドハマりなんて言葉では表せない程に、女体化に心を持っていかれていた。

心の奥底。深い深い場所で、自分も美少女になった上で無様にチン負けしたいと言う願望が刻まれたのだ。

どんな財宝より、権力よりも、TSメス堕ちしたいのだ!!と。

それなら彼の行動は可笑しく無いか?そんな風に思った人は些か考えが浅いと言わざるを得ない。

何故TSメス堕ちを夢見ている筈の男が、TS物を毛嫌いしたかの様な行動を取ったのか。その疑問の答えは極めて簡単だ。

——だってそうしないとメス堕ち出来ないだろう?

良いだろうか。TSメス堕ちとは元男にのみ許された、とても男らしい素晴らしい権利なのだ。

美少女(元男)が、「自分は男なんだから絶対にチンポなんかには負けたりしない——!!」と雄々しく吼えて、しかし「やっぱりチンポには勝てなかったよ……」と無様にチン負けする事で完成する一種の芸術なのだ。

しかるにメス堕ちをする為には、まずメス堕ちを忌避しなければならぬのである。喉がカラカラの脱水症状寸前の状態こそが、水を最も美味しく感じる瞬間なのと同様に。

メス堕ちを毛嫌いし、「絶対にチンポなんかには負けたりしない」と決意した上で敗北する事こそが最高の快楽を味わう方法なのだ。

彼の行動の理由は、つまりそういうこと。

その証拠に、その日萎えたと思ったはずの彼のチンポは、彼の生涯で最も熱く最も固くそそり勃っていたのだから。

しかしまあ、だから如何したと聞かれれば、どうもしていないと答えるより他に無い。男の願望は彼の心の奥底——無意識の領域に刻まれた物だ。

それに彼の望みは、モロッコに行つて息子にバイバイすれば叶う現実的な物では無く、あさおん（朝起きたら女になっていた）的な非現実的な物。

現実にて、その様な展開が起き得る筈もなく、結果として表面的には彼の行動に一切の変化は見られなかったのだ。

何処か満足できない感じつつ平凡に生きてきた男は、そのまま平凡な人生を終えていく——筈だった。

しかしまたしても大きな転機が彼を訪れる。

ある時、男は事故で死亡した。

それ自体は、何の作為も無い、純然たる不運である。

しかしながら驚天動地の事態は其処からであった。

死した男の魂。

一体如何なる偶然か、それとも男の強い願望が引き寄せた必然か。

彼の魂は彼の意識を失うことなく、別の世界に移動し赤子として産まれ直したのである。

それも女として、所謂TS転生と言う奴である。

彼が転生した世界は、表向きには転生前の現実と同様だが、裏側で『妖魔』と言う男は喰らい、女は苗床にするという人類の天敵が跳梁跋扈しているエロゲの様な世界であった。

そんな世界に生まれ直した彼——いいや彼女の名前は、シャルロット＝リリー＝ホワイト。

妖魔に対抗する『退魔師』エクソシストの家系に産まれたアメリカの少女である。

■ (ま、まさか女になってしまふなんて……!!)

シャルロットの歳。

彼女は己の人生に絶望していた。

TS転生切に望んでいたと言う全く望んでいない事態。

(しかも妖魔なんて存在が居るなんてっ!!?)

オマケに今世の父や母から教わった妖魔なる存在。

両親はボカシて話していたが「危険だから、絶対に近づいちゃ行けないよ!……シャル

は特に」と何度も念押しをされた所を見るに、女が捕まれば碌な事にならないのだろう。

最高 最高 最善
最低だ。最低最悪だ。

よりにもよってそんな世界に、現時点で既に将来有望な美少女に産まれてしまった

幸運
不運をシャルロットは嘆く。

「パパあり。私もパパみたいに退魔師になるう〜」
エクソシスト

（とにかく対抗出来る力を身に着けないと——!!）

オレっ 娘 は趣味じゃないから
周りに不審に思われない為に少女らしい態度と口調で過ごす屈辱喜びの日々の中、シャル

ロットは決意した。

「……………シャル。良いのかい」

「うん。私もパパみたいに困っている人を助けられるようになる〜」

「辛かったら何時でも言うんだよ。一般人として生きていける様にするからね」

——妖魔と戦う退魔師になると！
エクソシスト

一般人になっただけなら 何時時までも犯されなくても可笑しく無いのだから。
対抗出来る力を持たなければ、何時犯されても可笑しく無いのだから。

（そうだ。私は男なんだ!!絶対に犯されたりしないんだ!!ふふっ。強くなったら日本後ろ盾を

無くしても
行っても良いかも）

そう。

シャルロット||リリーホワイトは絶対にチンポに負けたりなんかしない——!!

…：なお、この世界は霊力と言う人の魂を燃料にした力が使える世界である。

故に強い願望や思いを持った者は、その者だけが扱える特別な能力を得る事がある。

であれば、転生してもなお自我を失わない程の強い願望を持っているシャルロットが、特別な能力を得ないなどと言う事があるだろうか？いや、無い（反語）。

最早、当然の権利としてシャルロットは彼女自身が気づくことの出来ないとある能力を取得してしまっていた。

○【完全敗北・屈服・雌落ち・チン負け願望】…容姿や魅力、戦闘能力の成長率が激増するが、代わりに性的な行為及び、それらの行為を目的とした状態異常に対する耐性が激減する。

ウオオオオオオオオオオ——!! さあ、掛かってこい竿役共!!

シャルロット||リリーホワイトは、少しチンポを突っ込まただけで雌落ち奴隷オナホ妻になるぞ——!!



東京、新宿。

「ヒイイイイツツー!!」

「イヤアアアアアアアアアツツー!!」

薄暗く、そして都会ではあり得ないほど寂れた廃墟が立ち並ぶ奇妙な空間の中。

30人以上の少年少女の、恐怖と焦りで彩られた叫び声が木霊していた。

その叫び声の理由は極めて単純明快。パツと見ただけで、誰でも理解できる。

彼らは化け物に囲まれていた。

人の血肉をこねくり回して作られたかのような色をしたアメーバの如き不定形の怪物。全身に幾つもの目と口が張り付いている姿は、見るだけで総毛立つ気色の悪い物である。

そんな見るだけで気の弱い者であれば失禁するであろう怪物が、辺り一面にビッシリと。

これぞ妖魔。人の負の感情から発生すると言われていている人類の天敵である。

都会にあるまじき奇怪な空間も、妖魔が作り出す幽世と言われる異空間が正体だ。

明らかに食われる寸前の獲物と言った風情の少年少女らであるが、彼らに対抗策が全くないと言う訳ではない。

何故なら彼らは人類で唯一、妖魔に対抗できる者たち——退魔師であるのだから。

しかしながら、ただ一つだけ悪い点を挙げるのならば、彼らは退魔師は退魔師でも、その卵。

最近、力に目覚めたばかりの『独覚』と言われる半ば素人集団であると言う事だろう。

「アアアアアッ！腕がアアツツ、腕がアツツ!？」

「なんでっ、なんでええ。なんで、こんな場所に来ようなんて言ったのよおおおツツ!!」

生兵法は大怪我のもと、とはよく言ったものだ。

そもそも彼らが苦境に見舞われた原因は、その半端に身に着けた退魔師の力にこそあった。

学校で行った肝試しが原因で靈力に目覚めた少年少女たち。

あれよあれよという間に退魔師たちが集う機関に入れられて、最低限度の教育を受けさせられる日々。

(彼ら的には)ドンドン増していく自分たちの実力。それに比例して上昇していく若い者特有の全能感。

そして許された自由時間で遊びに来た場所で見つけた、妖魔の住処であると教えられた幽世への痕跡。大きさからして低級妖魔。

もし仮に発見したとしても、絶対に近づくか自分たちに報告する事。と教わっていたにも関わらず、「自分たちなら、まあ大丈夫だろう。一般人が被害に合わないように退治しなくちゃ！」と言う根拠のない自信に突き動かされて、彼らは妖魔の住処に突撃した。

その結果がこれだ。

人間を超えたと過信していた実力は、低級の妖魔にすら通じなかった。

彼らはあつという間に追い詰められた鼠となった。

少年たちは幾つもの打撲と裂傷を負っている。

少女たちは着ていた服を溶かされて、体にヌメる体液を掛けられている。

最早、彼ら彼女らの末路は言うまでもない。

「たすっ、助けてえ〜っつっつ」

「だれがああっつ、だれかああっつ」

現実はどこまでも残酷だ。

少しばかり特別な力に目覚めたからといって、いきなり化け物と戦える筈がない。

それと同様に、こんな場面で助けを求めた所で都合よく来る筈が————

「——『雷鳴よ』」
call thunder

その声は、どこまでも凜として、喧々諤々たる空間の中でも、とてもよく響き渡った。突如として幽世の中を、雷が覆った。

雷。

古来では神が鳴らしている物だと思われ、神鳴りが語源であるという説もある現象。

その説が正しいかどうかはさておくが、そう言われる理由は良く分かった。

この場に発生した雷は、正しく神業としか思えなかったからである。

幽世全体を埋め尽くした稲妻は、妖魔たちを瞬時に消滅せしめた。

それでいて、哀れな被害者である少年少女らには火傷「つ負わせていない」と言うのだから、奇跡の御業というより他にないだろう。

「皆さん、大丈夫ですか？もう、安心ですからね」



「――あ」

「……………うあ」

そして現れたるは一人の少女。

金髪碧眼の明らかに外国人だ。年は少年少女らと同じか少し上と言った所か。見た目に反して、流暢な日本語を喋っている。

彼女を視認した途端、少年少女らは自分たちが死やそれ以上に辛い目に遭う寸前であった事すら忘却し、見惚れていた。

彼女の発する雰囲気有余りに圧倒的であったからだ。

まず単純に見目が美しい。

彫りが深く極めて整った顔立ちは、映画で見られる女優すら凌駕している。

流れるような金の長髪は、絹のような滑らかさと宝石の如き光沢を放っている。

女性にしては高い170近いであろう身長も、出る所は出て引つ込む所は引つ込んだモデル体型故に気にもならない。

特に圧巻なのは、100cmを超えているであろうサイズのダイナマイトバスト。

鎧とインナーとヒラヒラを組み合わせた、二次元の姫騎士キャラの様な服装の可愛らしく凛とした服装は、しかし胸部の膨らみの主張が強すぎて些か性的な魅力が強すぎる。

スカートと黒のハイソックスの間より顔を覗かせる太腿も極めて艶めかしく、彼女の姿を見た少年たちの肉棒は、知らず知らずの内にそそり勃っていた。

そして更に印象的なのが醸し出される圧倒的な存在感。

これは違う。

妖魔に殺されかけた経験よりもなお、彼女をひと目見た事が、少年少女たちの鼻っ柱を折っていた。

これが退魔師。これが本物。

ああ、自分たちはなんて烏滸がましい勘違いをしていたのだ。

彼女に比べれば己たちなど塵芥に過ぎない、と。

「シャルロット||リリーホワイト……………」

誰かが呟いた。

しかし誰でも良いだろう。皆の総意である。

突然、現れた少女の事を少年少女らは知っている。

いや、正確に言うのなら、最近退魔師の世界に足を踏み入れたばかりの少年少女らですら推測可能なビッグネームであったと言うべきか。

シャルロット||リリーホワイト。

『妖魔撃滅数日本一』^{アメリカ}『米国からやって来た女神』『金の天使』『人界の星』『世界最高の

偶像』^{アイドル}『妖魔の天敵』^{ワルキューレ}『幽世の戦乙女』『現し世の華』——それら全てが彼女を表す二つ名だ。

容姿端麗・頭脳明晰・一騎当千・温良篤厚。本来ならば言い過ぎにも程がある美辞麗句が、しかし彼女を前にした時だけは釣り合うどころか物足りない。

そんな可憐で最強な日本が、いいや世界が誇る最高の英雄。ヒロイン

それが彼女であった。

「さあ。安全な場所に帰りましょう。よく頑張りましたね」

極めて素早い動きで負傷者を癒やし、損傷した服を霊力で補ったシャルロットは、とても柔らかに、そして微笑んだ。

——この日、この時覚えた感動を。少年少女たちが生涯忘れる事はないだろう。

端的に言おう。シャルロットはやりすぎた。

心の奥底で、素晴らしい敗北を夢見て、单身、日本へと渡り妖魔と戦い続ける日々。

それ自体は良かった。

一見、チートな成長速度だが、その実プレイして5分でエロシーンに行ける低価格凌辱エロゲのヒロイン染みたクソ雑魚チヨロマンのシャルロットであれば、直ぐに敗北苗床ダブルピースエンドを迎えられる筈だったのだ。

しかしながら、「最高に気持ち良い敗北を味わうには、自分のやれることを完全にやった上で、完膚なきまでに負けるのが一番だ」と言う、やはりこれまた無意識の考えに従って行動してしまっただのが良くなかった。

一日も休むこと無く続けられる猛鍛錬の日々。成長速度増加の能力も相まって、比類なく高まっていく実力。

しかしそれでもエロゲヒロインボディ。少し油断や慢心をすれば敗北・凌辱コースに乗

れるチャンスは幾度もあった。

ある時は、自分の普段の状態異常耐性を過信していれば、催眠洗脳雌奴隷ルートに乗れるチャンスがあった。

——キチンと状態異常に対する装備を付けていたので、問題なかった。

ある時は、急いでいる時に、体に付いた小さな妖魔を「自分ならばこの程度大丈夫だろう」と慢心して進むことを優先していれば、ソイツに局部を弄られて、それが原因となつて、敗北苗床コースに乗れるチャンスがあった。

——小さな妖魔相手でも慢心せず、しっかりと倒したので、問題なかった。

他にも似たようなチャンスは数多くあったのだが……キチンと人の話や警告を聞き、思慮深く考え、油断や慢心をせず、力に奢って他者を軽んじたりしない、そんな凌辱エロゲヒロイン失格の行動を取り続けた結果——シャルロットは勝った、勝ちすぎた。

一度も敗北をすることもなく勝ちを積み上げていく毎日。

遂には、下手をすれば日本を、いいや世界を暗闇に陥れていたであろう、永い時を生き、高い知恵を持った妖魔の徒党を幾つも壊滅させる始末。

どう考えてもやりすぎである。

これがもう少しマイルドな活躍であったのなら、彼女の活躍を疎んだり、後ろ盾の無い美少女の肉体を狙ったりした権力者などの、仲間の筈の人間から後ろから撃たれたりして、肉奴隷ルートに乗れたのだろうか……いかんせん勝利を積み上げ過ぎである。

出る杭は打たれると言うが、出過ぎた杭は打つに打てない。

双肩に乗った勝利の数が多すぎて、今のシャルロットにコケられると、日本も同時にコ

ケかねないので、下手に邪魔を出来ないのだ。

それでいてシャルロット的には、本当は完全敗北・屈服・メス堕ち・チン負けしたいので、どこか完全に満足できない毎日。

それを埋めるべく、より厳しく自分を高め、より他者に優しくし、より勝利を積み上げて行く。

当然、増していく実力・人望・名声。

そしてシャルロットは気づいたときには盛すぎにも程があるスーパーヒロインになってしまっていたのだった。

第一章…破滅〈念願〉の始まり

日本妖魔対策機関——東京支部。

「ウチデシー——内弟子ですか」

「はい。宜しければ一考頂ければ……」

上質な草で作られた畳の上に敷かれた座布団の上。

極めて綺麗な正座の姿勢を取りながら、シャルロット||リリーホワイトは麗しい声を部屋に響かせた。

それが届けられる先に居るのは、同様の姿勢で対面しているスーツに身を包んだ人の良さそうな初老の日本人男性。名前を田中と言う。

「内弟子の一人や二人を育て上げてこそ一人前の退魔師。このニホンでの風習ですよね。ふふっ。実は何時、話が来るのだろうかと思っていました」

「ははっ。いやはやこれは。古臭い意見です。シャルロットさんを相手にそんな馬鹿な事を言う者など日本に一人も居ないでしょう。この話も断っていただいてなんの問題もございません」

「いいえ。妖魔に対抗できる人材をキチンと育成するために考えられた、合理的な風習だと思えます。ゴウに入ってはゴウに従え。ニホンの退魔師としての責務より逃れる気はありません。この話有り難く受けさせて頂きます」

妖魔とは、人の負の意志から生じたもの。

しかるにその戦いは永遠に続いていく。

されど退魔師の寿命は（場合によって1000年以上不老の者も居るが）永遠では無い。よってしっかりと技を後世に残していく必要がある。合理的な話だ。

「勝手な皮算用ですが、シャルロットさんならば、そう言ってくれると思っていました。実は候補を予め選出しておりました」

そう言って田中が取り出したのは紙の束。

類まれなる実力を全く鼻にかけず、温厚で慈愛に満ちたシャルロットならば、提案を受けてくれるはずだと信じていたのだろう。

「見せていただいても？」

「勿論です」

シャルロットの厳しい戦いを幾度となく潜り抜けた人間の物だとは思えない程に、白く傷一つ無い綺麗な指が、渡された分厚い紙の束をペラペラと捲り上げた。

そんな僅かで一体何が見れるのか疑問なほどに僅かな合間だが、シャルロットの驚異的な動体視力を持ってすれば、書いてある全ての情報を頭に叩き込むのは容易だった。

「……むう」

「何かご不満な点がありましたか？シャルロットさんのご要望には出来る限り沿うようにと、上からの許可も取っておりますのでなんでも言ってお下されば」

シャルロットの口から漏れ出たのは何処か納得がいていない所があると分かる声色。

田中はそれを人選に不満があったのか、と予想したが、しかしそれは的外れであった。

「いいえ寧ろ逆です」

「と、言いますと」

「内弟子とは霊力の親和性を元に決められる物だと聞いています。しかしこの候補者方はそれとは別の基準で決められた様に見えます。察するに、私の事を慮って下さったのではないですか？」

「それは……」

シャルロットの言葉を理解するには、まず日本の退魔師たちの間における内弟子という制度について説明せねばならない。

内弟子——それは読んで字の如く、自らの内側に入れる程に距離の近い弟子の事である。

ひとつ屋根の下、寝食を共にしながら付きっきりで過ごし、教え学ぶ師弟。

その選定は、シャルロットが述べた通り、霊力の親和性を元に決められる。

親和性——即ち相性。

霊力と言う力には相性が存在するのである。

相性の良い者同士が協力すれば1+1が100にも1000にもなる得る程で、特に効果的なのが育成面である。

霊力の親和性が高く、実力に差のある二人が近い距離で過ごした場合、実力の低い側が高い側に引っぱり張られて、非常に成長しやすくなるのである。

その成長の上昇率は極めて高く、稀代の教え上手が一年教えるより、親和性の高い教え下手が一ヶ月指導する方が効果が高い、とまで言われる程だ。

ただ一つ問題点を挙げるとするのなら、当たり前前の話だが霊力の親和性のみを重視して決めた弟子は、必ずしも師匠側の要望に沿う人物では無いという事だ。

性格、年齢の不一致は勿論の事。

最悪、男女が極めて近い距離で過ごさなければならぬ場合すら出て来る。だからこそ、内弟子を育ててこそその一人前と言う話なのであろう。

そしてならばこそ、シャルロットに渡された候補者のリストは可笑しかった。

100人以上いる候補者の全てが女性。そしてその誰もが才気に溢れていると言うのだから、余りに作為が透けて見えて笑うより他に無い。

無論、本当に彼女らがシャルロットと霊力の親和性が高い相手であると言う可能性が無い訳では無いが、貰った資料には一番大事な筈の親和性のデータだけが抜け落ちている上に、田中の沈黙が答えだろう。

「今まで私がこの二ホンで幸せに過ごしてきたのは、タナカさんを始め、皆様方の親切があったからこそです。しかし、いいえだからこそ、これからは出来得る限り二ホンの皆さまに合わせたやり方をして行きたいのです。ゴウに入ってはゴウに従えと言った言葉に嘘は有りません」

「シャルロットさん……」

シャルロットはアメリカから、単身日本へとやって来ている。

心の表側の理由は、本当の意味での故郷で、落ち着くからだからだが、奥底の理由は自ら後ろ盾を投げ捨て異国に行くことで性的な目に遭いやすくなるためである。

しかしながらその裏側の欲望は、やはり積み上げ過ぎた勝利によって空回りしていた。端的に言って日本側としては万が一にでもシャルロットにへそを曲げられて、アメリカに戻られては困るのである。

よって彼女は極めて忬度——ぶっちゃけ鼻屑を受けていた。

今回の内弟子の提案を見れば分かるように、本来であればエロイベントに繋がったかもしれない、面倒な慣習や風習などは全スルー。

へへっ、シャルロットさん。これで何時までも日本に居てくれやすよね!?!と言う揉み手が透けて見えるよう。

転生前のシャルロットであれば、これらの鼻屑を、へへっ。すいやせんねえ!!と有難く受け取った事だろう。

しかし、今は違う。

如何に心の奥底の変態願望に突き動かされた結果だとは言え、過ごしてきた歲月・積み上げた努力・取って来た行動は嘘を吐かない。

今のシャルロットは最早、嘗てのどこにでもいる平凡人間では無い。

(自分自身ですら気が付けていない心の奥底の度し難いド変態願望を除けば)他者に優しく自分に厳しく、思いやりと、責任感と、協調性と、決断力に溢れ、しかし奢らず謙虚で日々精進を怠らない美少女と言う、完全無欠のハイパーヒロインである。

そんなシャルロットが何時までも自分に対する鼻屑を良しとする訳も無かった。

「ですので良ければ靈力の親和性の高い候補を挙げて下さい。他の方々と同じく、そこより選びたいと思います」

「……分かりました。そこまで仰るのなら」

或いはシャルロットならばそう言うのかも知れないと予想していたのだろう。

田中が今度は10枚ほどの紙の束を出す。

それこそが、シャルロットと霊力の相性がとても良い相手であった。

「——むっ。これは」

「……………」

本当の候補者たち。

シャルロットの元男の魂が関係しているのか、心に秘めた願望が関係しているのかは分からないが、今度は先程とは打って変わって男が多かった。

男12人に対し、女1人。

「分かりました。ではこの方に致します。先日お会いした『独覚』の方の1人ですね」

「その子は、」

シャルロットが選んだのは、ただでさえ良くない候補生の中で最も悪いと言える相手だった。

ふとだ

太田 たろう 太郎。

最近、霊力に目覚めたばかりの高校生。

無節制ででっぷりと太った体。汚い身だしなみ。人を不快にするオドオドとした暗い性格。

凡そ全ての要素がまるでシャルロットに釣り合っていない相手。

そもそも、20年近く女として過建前ぎしてきたとはいえ、未だ男性と友情ならともかく、愛情を育む気は一切無いと強い思建前いを抱くシャルロットからしても出来れば選建前びたくな

い相手だ。

しかしながら……

「この方との親和性がずば抜けて高いです。普通であれば間違いなくこの方のみが内弟子候補となるでしょう。であればそれに従うのみです」

「分かりました……。その様に手配しておきます」

「よろしく願います」

吐いた唾を飲む気が無い以上、実質的に選択の余地は無かったのである。

こうして最強可憐「S」金髪爆乳美少女転生者、シャルロットⅡリリーホワイトは、性欲とデカチンだけが取り柄のキモブタ陰キャを内弟子にして、ひとつ屋根の下で生活することになったのである。

（まあ、少し不安はありますが敵と戦う訳でも無し、少し気をつければそれで済む話でしょう。この方だからという訳でなく、私が殿方とどうにかなる訳がありませんね、ふふっ）

この時シャルロットは、シャルロットⅡリリーホワイトとして産まれてから初めて油断した。

今まで培って来た経験があれば、殆ど素人同然の年下の男の子一人と過ごした所でどうにかなる訳が無いだろうと。

それは本来、油断とも言えない、完全に正しい予測だ。

シャルロットの能力を持ってすれば、本来ならば絶対にどうにもされない。

しかしシャルロットは知らない。

まさか自分の肉体と魂が、エロい事を前にするとあらゆる耐性が激弱になる、犯され待ちドマゾドスケベクソ雑魚ナメクジだなんてっっー!!

第二章・優しくて無防備なお師匠様

太田 太郎は幸せの絶頂期にあった。

これまで彼の人生は、彼にとって決して良いものでは無かった。

生来の暗い性格に、不摂生の結果の肥満体。

他者より優れた所と言えるのはアニメやゲームの知識に、使う相手も居ないのに日々高まり続ける性欲くらい。

そんな人間が他者より好かれる訳もなし、一人の友人もおらず、学校では虐められているとまでは行かないが、クラスの悪ガキ共から日々イジられ馬鹿にされる始末。

味方と言えるのは両親くらいの物で、しかし親元から強制的に離れさせられているので、現在の味方は実質居ないわけだ。

しかしそんな彼にも一つの人生の転機が訪れた。

霊力の目覚め。

同じクラスの人間と一緒に、と言うのは余計であったが、まるで大好きな二次元の様な展開に太郎の胸は激しく高鳴った。

……しかし、そんな喜びは直ぐに消え失せた。

特別な非日常に浸れたのは力に目覚めてから暫くの間のみ。

太郎に大した才能は無かった。

同じクラスの人間にどんどん差をつけられて行き、結局は元の立ち位置。

その自分より才能があると思っていたクラスメイトたちですら、低級の妖魔相手にす

ら為す術もなかった事を鑑みれば、太郎が如何に味噌っかすであるか分かつというものの。

最早、ただ普通の生活と言うセーフティネットを失った形。

まるで不幸のどん底に落ちてしまったかのようで、太郎には自分の明るい未来が全く見えてこなかった。

しかしその暗雲を全て吹き飛ばす幸運が彼の元へと訪れたのだ。

「これから貴方の師となることが決まった、シャルロット||リリーホワイトです。未だイタラヌ身ですが精一杯頑張りますので、どうかこれからよろしくお願いしますね」

「ふ、太田 太郎ですっ、よ、よろしくお願いします。リリーホワイトさんっ」

「ふふっ、そんなに緊張しなくても大丈夫です。それに親しいものは私のことをシャルと呼ぶのでそう呼んで下さい。一緒に仲良く頑張つて行きましょう。ね。タロウ」

「は、はひっ！」

シャルロット||リリーホワイト。

先日、太郎やそのクラスメートを助けてくれた相手。

二次元キャラ顔負けの、現実に存在したスーパーヒロイン。

そんな相手の弟子になり、一つ屋根の下で生活出来ると言うのだ。

戦闘の時の衣装とは別の、可愛いワンピースに身を包み、クラスの女子とはまるで異なり太郎に優しげな笑みを浮かべてくれるその姿は、どこまでも可憐で美しかった。

テレビの中のアイドルですら及ばないほどに整った顔立ちと、服の下からでも強烈に雌の色香を漂わせる爆乳に、太郎は思わず下品な視線を向けてしまったが、それでもシャ

ルロットの優しい態度が崩れることは無かった。

「ああ。少し力の使い方が違いますよ。???。謝らなくても大丈夫ですよ。誰にでも失敗はあるものです。慌てず、冷静に、ねっ?」

「ふふっ。ほらっ、直ぐに出来るようになったでしょう?タロウは筋が良いですよ」

「もうっ、タロウ。あまり女性に不躰な視線を浴びせてはいけませんよ。健康な男の子なら仕方のないことではあるとは思いますが、少しずつ直せるように頑張っていきましょう?」

「タロウの好物はなんでしょうか?折角、手料理を食べて貰っているのですもの、出来るだけ美味しいと思って貰えると嬉しいですよ」

シャルロットはどこまでも優しかった。

彼女からすれば息をするレベルで簡単な事すら出来ない太郎を、根気強く穏やかに教え導いてくれる。

それにその亀の様な歩みを一度たりとも馬鹿にせず、自分の事に喜び、褒めて祝ってくれる。

駄目な所を指摘する時も、感情的に怒鳴ったり詰ったりすることは無く、ましてやクラスメートの悪ガキの様に、小突いたりなどする訳もなく、冷静に柔らかく諭してくれた。

神秘的とすら言える美しさのシャルロットに、そこまで親切にされ続けて女性耐性がゼロの太郎が心を持っていかれない理由があるだろうか?いいや、無い。

最早、太郎の心と頭は常にシャルロットの事を想っているレベルで恋の病に侵されて

いた。

いや、そもそも心を持っていかれると言う意味では、太郎だけでは無く彼のクラスメートの男子全員が、妖魔から助けられた時にシャルロットに心を持っていかれているのだ。シャルロットの内弟子に選ばれた時の、周囲の男子の反応を思い返すと太郎は笑いを禁じえない。

何時も自分を弄ってくるクソ野郎や、自分の初恋の人や色んな女子から好かれているハーレム漫画の主人公の様なゴミ野郎が、己の事を隠せぬ嫉妬に満ちた瞳で見えてくるのだ。

その優越感。してやったりという思いったらない。

それに太郎自身の才能はゴミだが、最強無敵のシャルロットに引き上げられているお陰で、クラスの中で一番早い成長を出来ている。

正に人生の絶頂期。

そんな景色全てが輝いて見える日々の中、凡そωヶ月の時が経過した。

■
——深夜。シャルロットの自室。

僅かに素肌が透けて見え、胸の谷間や太腿のかなり上の方まで露出している、どこことなく扇状的な、細部にレースをあしらった黒のネグリジェに身を包んだシャルロットが、布団の中ですやすやと寝息を立てている。

彼女の家は純和風であり部屋の仕切りドアでは無く、ふすまでされており、必然的に鍵を掛けられたりはしない。

一人暮らしならばともかく、恋人でも無い男と一つ屋根の下で過ごしているのにこれは、些か危機感が足りていないと思うかも知れないが、それは違う。

彼女のこれまで培って来た能力。

それをあえてスキルと言う形で表現するところなる。

○『常在戦場のシックスセンス』…自らの身に降りかかる危険、苦難をいかなる時でも、どんな小さいものでも察知し、対応出来る能力。

また人の気配にも非常に敏感で、やろうと思えば数キロ先の人間の気配すら感じ取れる。

○『瞬間覚醒』…睡眠などの意識消失状態から、危険を感じた際に瞬時に目覚めることが出来る能力。

磨き抜かれたシャルロットのシックスセンスは、いかなる防犯アイテムをも凌駕する。

その鋭さは、蚊より小さな隠密性に特化した妖魔の気配すら安々と感じ取る。

この地球上で、シャルロットの警戒を抜けて彼女に危害を加えられる者など、一人も居ない。そう断言できる。

そう！シャルロット||リリーホワイトが、未熟な弟子の一人に不埒な真似をされる訳が無いのだ——!!

「シャル師匠っ、シャル師匠うう〜」

「すー」

全然ダメ!!!

豚のような鼻息を漏らす太郎が、シャルロットの体に抱きつき体を擦り付けている。

今まで肉親以外に一切許したことの無いパーソナルスペースが侵されていると言うのに、シャルロットはまるで気がつくことが出来ていなかった。

先程のスキルはあくまで通常の状態での話。

性的な行為を前にした場合、己のスキルが全て反転する事をシャルロットは全く理解できていなかった。

○『戦見矢矧せんけんやはぎのインモラルセンス』；自らの身に降りかかる性的な危険、苦難をいかなる時でも、どんな小さいものでも察知出来ず、対応出来ない能力。

また隠されて性的な行為をされた痕跡に非常に鈍感で、仮に自身の体に性被害の形跡が残っていても、気づけなかったり、都合よく解釈してしまう。

○『淫蕩惰眠』：睡眠などの意識消失状態から、相手が望まない限りどれだけ激しい性的な行為をされても覚醒出来ない能力。それでいて、体は敏感に快楽反応を示すようになっている。

こういったスキルの効果によって、シャルロットは自分の寝込みを性的な意味で襲ってくる相手に全く対応することが出来なかった。

今までであれば、自らの能力を決して過信せず、質の良い霊的防護術具をしっかりと使用していたのでどんな時でも問題は無かったのだが……………。

弟子相手にそれは失礼。相手に信頼して貰うためには、まず自分が相手を信頼しなくては。それに最悪、自前の能力でもなんとかなるだろう。と極めて善良かつ本来であれば問題のない判断の結果、家や己に仕掛けてある防護術具の警戒対象から態々、太郎だけを外

してしまったのだ。

結果として太郎にとっての今のシャルロットは、警戒しているつもりで、何も出来ないエロイイベント起こし放題の、ドスケベエロ雌でしか無くなってしまっていたのだ。

が、しかし！だがしかし！！

これで完全に全てが終わってしまったと言うわけではない。

シャルロットの並外れた才能は、当然その肉体の防御性能にも遺憾なく発揮されている。

それをスキルとして表すならやはりこんな感じになる。

○『女神の肉体』..あらゆる攻撃・状態異常に極めて強固な耐性を持ち、同時に強固な身体能力・霊力・回復能力を併せ持つ。

柔らかくか弱そうに見えるシャルロットの肉体だが、その実その防御能力は単身で堅固な防衛砦すらをも上回る。

その防御能力を抜いて彼女に傷・悪影響を与えるのは、並大抵のことではない。如何に体を触られたとて、それで彼女がどうにかなる訳では無いのだ。

そうシャルロット||リリーホワイトが、未熟な弟子の一人にあひん♥あひん♥言わされる訳が無いのだ——！！

「はあっ……！師匠っ！師匠ってほんと感じ易いねっ……！！」

「んひっ♥おほっ♥いきゅっ♥んおっ♥♥♥♥」

全然ダメ！！！！ (TAKEN)

太郎の手が欲望のままにシャルロットの体を弄ぶ。

相手のことを考えない自分よがりな愛撫。

普通であれば、こんな物で感じる女性が存在するのかすら怪しいレベルなのだが、シャルロットの口からは止まることのない嬌声が溢れ出て、あろう事かオマンコから潮すら噴いてしまっていた。

当然の話だが、肉体の才能も反転していた。

○『淫女神の肉体』…ありとあらゆる性的な行為に対する感度が異常上昇し・性的な行為を目的とした状態異常への耐性が激減する。

また性的な行為をされる度に、その部位が相手専用の物になっていく。

一定以上の肉体が同じ相手に墮とされてしまった場合、肉体全てが未来永劫その相手の肉奴隷になってしまう。

この世で最も性的な刺激に弱いクソ雑魚ナメクジドスケベ雌がシャルロットである。

一体どうしてこのような事態になってしまったのか。

この3ヶ月を振り返っていこう。

第三章…♡ヶ月の軌跡…夜に響く嬌声

——♡ヶ月目は何も出来なかった。

基本的に太郎は臆病な小心者である。

良くも悪くも、女性を襲う度胸なんてありはしない。

それが自分より遥かに強くて、しかも己の生活を保証してくれている相手なら尚更だ。

よって太郎がシャルロットの弟子となってから最初の♡ヶ月。

彼はシャルロットに性的な行為を行うどころか、もしもバレてしまったら……、と言う

恐怖感によりたった一度の自慰すら出来なかったのだ。

——♡ヶ月目は抑えが効かなかった。

しかしながら、我慢しすぎたのが逆に良くなかったのだろう。

どこまでも自分に優しくしてくれる美少女師匠であるシャルロットに対する、燃え上がるような恋情。

そして家の中に充満している魅力的な雌の匂い。

目が覚めた時に、パンツの中が自分の精液で溢れていた時を境に、太郎の自制心や緊張感は、もしもバレてしまったらという恐怖感すら乗り越えて、箍が外れていつてしまった。

そして彼の行動は少しずつ、少しずつ、エスカレートして行くこととなる。

最初はただ自慰を繰り返すのみだった。

自分に用意された部屋の中。

シャルロットとの触れ合いを思い返したり、彼女とセックスする妄想をして己の一物を扱き続ける毎日。

次にシャルロットの写真をおカズに使い始めた。

師匠と一緒に写真を取りたい！と言って撮らせて貰った心シヨットの写メ。

そこから自分の姿を消して、シャルロットだけが映るように加工した写真は、大して露出があるわけでも無いのに、今までおカズにしてきたどんなエロ画像よりも刺激的だった。

そして太郎の衝動は、彼の内側では収まりきらなくなった。

シャルロットが入った後のお風呂のお湯を飲む。

シャルロットが家に居ない隙に、彼女の下着を拝借する。

何処かで一度でもシャルロットに見咎められ、注意されたなら太郎の行動は止まっていただろう。

しかしながら残念な事に、シャルロットは普段はどんな小さな違和感にも気がつくのに、ことエッチなイベントに限り、底の抜けたタライよりもガバガバな注意力になってしまふ女。

太郎の部屋に入った時に夥しいイカ臭いニオイを嗅ぎ取っても、自分の使っているシャンプーに精液を混ぜられても、着用済みの下着がいつの間にか消えていても、(太郎にとって)都合の良い解釈をするばかりで、一度も気がつくことは無かったのだ。

そうして、後少しだけ、もう少しだけ、と繰り返していく内に、太郎の行動は更に過激になっていった。

——そして〇ヶ月目。遂に太郎は寝ているシャルロットの部屋に侵入した。

最初は単純に寝顔を見て帰っただけだった。

優しいシャルロットなら、そのくらいであれば、用事があったら起こしに来たとも言え
ば、説教の一つや二つ位で許してくれるかもしれないと言う甘い考えが合ったからだ。

そうして何度か試しに侵入を繰り返しても、シャルロットが全く気が付かずに寝入っ
たまま合ったため、遂に行動に移す。

まず行ったのは彼女の寝姿を写真に納めることだった。

普段の格好とは比べ物にならない程に扇状的な彼女の寝巻き姿。

出す所に出せば、一枚数百万円以上にすらなりかねないお宝を、何枚も撮り続ける。

そしてあろう事か、彼女のネグリジェと下着の重要な部分を、脱がせ、ずらした。

日本に、いいや世界に名を轟かせる裏の世界の、最強可憐なスーパーヒロイン。

そんな神聖にして不可侵たる少女が、本来なら小指一本で消し飛ばせる雑魚自分に、寝込み

を良い様に悪戯されて、ぶつくりとした桜色の乳首や、一度も男に見せた事すらない綺麗

オマニコな女性器を、オレンジ色の薄明りの下に曝け出す光景。

そんな、とてつもなく淫らで、マヌケな映像に、太郎の興奮は天元突破した。

狂ったようにシャッターを押し続けた結果、今や彼の携帯の画像フォルダの中には、シ
ャルロットの艶姿が数百枚以上、保存されていた。

もはや総計、幾らになるのか予想も付かないお宝の山。

この時点で何万、何十万と居るシャルロットのファンから100度消し飛ばされても尚、

足りない所業。

しかしながら、此処まで籬が外れてしまった人間が、これで満足だと股間の矛を収めるだろうか？

勿論、そんな筈が無い。

そして太郎は遂に更なる一線を踏み越えた。

寝ているシャルロットの体を直接的に弄び始めたのである。

最初の内はやはり、少し触るだけ。

しかし、シャルロットがそれでも目覚めない事が分かると今度は体。

それでも、大丈夫だと分かると今度は胸や股と言った性的な部分。

やはりまたしても太郎の自制心は彼方へと消え去っていった。



――そして今に至る。

太郎によるシャルロットを辱める手つきはとても淀みなく、彼がどれだけこの行為を繰り返しているのかを千の言葉よりも雄弁に表していた。

「……すう。――すう」

「シャル師匠が悪いんですよ……！こんなにしても気が付かないから……！ほらっ、早く気が付かないと今日も大事な物を奪っちゃいますからね……！」

可愛い寝息を立てるシャルロットの唇に、太郎の唇が急接近する。

花が咲くような美少女の可愛らしい唇に、花が枯れるような豚面の脂ぎった唇が触れようとする合ってはならない冒瀆的な事態。

しかし、当然ながらシャルロットは目覚められない。

「ん、むうっ」

「はむっ！はい、今日も師匠の唇貰っちゃいました〜！」

そして、今まで父親以外の男性には決して許してこなかったシャルロットの唇がアツサリと太郎に奪われる。

数日前まではファーストキスすら未だで合った筈のシャルロットのキス経験は、しかし彼女自身が気が付かぬ内に、100の大台にすら乗りかけていた。

オマケにたった今、太郎の暴挙はまるで留まる事を知らなかった。

ほんの少し、たった数秒の間だけ唇を奪うことすら許されざる大罪だと言うのに、あるう事か太郎はそのまま数十秒間シャルロットと、顔と顔を密着させ続けた。

そして息苦しくなったからか、シャルロットの口が開いた瞬間を狙って、太郎はシャルロットの口内の、更に侵されざる部分に侵入し始めた。

「じゅるっ……！レロっ……！美味っ♥^{うま}師匠の口の中、美味っ♥^{うま}20年間誰にも許した事の無い、美少女唇、またまた頂いちゃいます……！！」

まるでぬたうつ蛇の様に、太郎の舌がシャルロットの口の中を蹂躪する。

口内のありとあらゆる柔らかい肉に舌を擦り付け、シャルロットの唾液をスポイトの様に吸い上げる。

もし仮にシャルロットの意識が合ったなら、あまりの嫌悪感に何度も嘔吐を繰り返したであろう程に気持ちの悪い行動。

しかしながら――

「んっ♥んむっ♥♥れるっ♥♥ちゅぞぞっ♥♥♥♥♥」

「~~~~~！はぁあっっ……！！師匠、可愛すぎっ……！！シャル師匠おお~~~~」
寝ているシャルロットの体は、どこまでも本能に忠実だった。

許されざる侵入者に対し、シャルロットの口がとった行動は、追い出そうとする拒絶反応ではなく、まさかの大歓迎だった。

無遠慮にズカズカと自分の尊厳を犯してくる太郎の舌を、”ようこそおいでくださいました♥”と言わんばかりに、シャルロットの舌がおもてなしする。

舌と舌を恋人の様に絡ませて、太郎と同じ様に彼の口内を吸い上げる。

襲っている太郎すらあずかり知らぬ事だが、シャルロットの口はとっくに太郎に屈服

していた。

愛しのご主人様がやって来た途端、シャルロットの口は盛大な歓迎を繰り返すのだ。

「師匠、ごめんねっ。でも、師匠が悪いんだからね、師匠がこんなにエッチだから……!」

「んう〜♥?」

無意識的に健気なご奉仕を繰り返すシャルロットに、太郎の我慢は更に弾け飛ぶ。

そして彼が次に狙いを定めたのは、男であればやはり向かわざるを得ないおっぱいとオマンコであった。

バストサイズ100を超えるシャルロットの圧巻たるダイナマイトバストを、太郎の手が遠慮なく揉みしだく。

弾力があってしかし柔らかいシャルロットのおっぱいは、まるでマシユマロの様に形を変形させ太郎の指を呑み込んだ。

「ほひゅっ♥ほっ♥ほお〜〜♥♥♥♥」

「やっぱり師匠って、とても敏感なんだね♥」

そして当然、おっぱいも既に屈服済みだ。

出会った男のほぼ全てに恋い焦がれたシャルロットの爆乳が、取るに足らない小物の豚男の物になってしまっているのだ。

打てば響くとは正にこの事で、胸に触られる度にシャルロットは淫らな音を奏でる楽器となって、嬌声を上げ続けていた。

「師匠の所為で勃起が全然収まらないよっ……!」

「おっ♥おほっ♥いきゅっ♥♥いきゅうう〜〜♥♥♥♥」

片手でコリコリと乳首を弄ってシャルロットを何度も雑に絶頂させながら、太郎はズボンの下から最早収まりの付かぬ勃起チンポを取り出した。

ガチガチのアツアツに熱された大きなソレは、もう既に我慢汁を滴らせていて、取り出された瞬間にムワツと雄臭い臭気を部屋の中へと撒き散らした。

そして太郎は、取り出した己のチンポをそのままシャルロットのオマンコにピタツ、とあてがった。

そしてその、絶対に不可侵たる乙女の花園を、欲望に満ちた男根で思うがままに――

「ああっ……。クソっ！挿入^いりたいけど、流石に不味いよなあ……！」

――貫かなかった。

挿入^いれてしまうのは流石に不味いと思える程度の自制心が、太郎の心の中に辛うじて残っていたのである。

……ぶっちゃけ、挿入^いれてもシャルロットが気がつくことは無いのだが、それは神ならぬ身である太郎には分からないことであった。

太郎は仕方なしに、シャルロットのオマンコのスジに沿うように、自分のチンポを擦り付け始めた。

「はっ……！ふっ……！本番っ、させてっ、くれないんだからっ！何時もの様にサービスしてよねっ……！」

「ほひよっ♥？おほっ♥ほくくっっっ♥♥♥」

身勝手な言葉を投げかけながら、太郎はシャルロットの体を思うがままに蹂躪する。ぶくぶくと肥え太ったその体で、シャルロットの均整のとれた体を押しつぶし、口で幾度もキスを奪い、手でおっぱいを揉みしだき、乳首を弄び、チンポはオマンコのスジに擦り付ける。

余りにもあんまりな状況に、しかしシャルロットの体はどこまでも素直に雌の反応を返す限り。

キスや、乳首を抓られる度に軽い絶頂を繰り返し、潮を吹き散らす。

絶頂^{それ}によってヒクヒクと淫猥に蠢くオマンコが、まるで指を入れると吸着するイソギンチャクのように、擦り付けられている太郎のチンポに吸い付いて、甘い刺激を提供した。

「あっ……！駄目だっ！もう射精^でるっ！けど、その前にな……！」

射精目前となった太郎だったが、何故かその瞬間に急いで立ち上がった。

そして彼はそのまま自分のチンポをシャルロットの顔へ押し当てた。

オマンコに中出し出来ないなら、せめて顔射したい。とやはり余りにも身勝手な欲望故だった。

しかしだと言うのに、ここで太郎に望外の幸運が訪れる。

「あむっ♥ちゅるっ♥♥ちゅるるるるっ〜♥♥♥♥♥」

「おほっ♥シャルししよお〜♥そんなことしたらっ……♥」

屈服済みのシャルロットのお口が、押し当てられたご主人様の肉棒に反応したのだ。まるで、愛しの王子様にキスをするお姫様の様に、エグいチンポの亀頭にキスを交わす。

そしてあろう事か、チューブ型のアイスを食べる時の様に、ちゅーちゅー♥と尿道を吸い始めたではないか!

唯でさえイキかけていた状態で、こんな刺激。

耐えられる訳がない。

「あつ、射精^でるっ……♥あつ♥あゝゝゝゝゝゝゝゝゝっ♥♥」

「んごっ♥♥ごぎゅっ♥♥はひゅっ♥♥」

臭っさくて、生暖かい白濁液がシャルロットの口の中に大量にぶちまけられる。

苦く、ネバネバと絡みつくソレを、しかしシャルロットは僅かも口から零すこと無く喉の奥へと流し込んだ。

「はえゝゝゝ♥えがった♥でも、もう終わりにしないと不味いかな」

「んちゅ♥ちゅっ♥」

大量に射精した賢者タイムで、冷静に戻り流石に今日はこれで終わりにしようとした太郎。

しかしながら、そんな彼のチンポを、未だ吸い付いたままのシャルロットの舌が丹念に舐め取り、お掃除をした。

ムクムクっ……!と再び太郎のチンポが勃起する。

「後、一時間位は大丈夫かな……!」

結局この後、太郎は〇時間ほど、シャルロットの体を弄び続けた。

——翌朝

「んっ！」

落ち着いた色調の和風カーテンから漏れ出す朝日に照らされ、シャルロットは清々しい気分で見起した。

最早、体と心に染み付いた百戦錬磨の戦士としての警戒心が自室と、自分の身の様子を注意深く読み取った。

部屋に充満する雄と雌の臭気！

一応拭き取られて入るが、布団や、寝巻き、果ては自分の体にまで付着しているネバネバした液体！

口の中に残る苦く生臭い何かの後味！

何度も絶頂し、濡れぼそった黒のレースのパンティーに、今もなお気を抜くとイッてしまいそうになるほど昂ぶった己の肉体！

それら全ての情報を、シャルロットの脳みそは一切損なうこと無く取得した。

(うん。今日も異常なし、ですなっ♪)

異常など欠片も見つからない部屋の様子に、シャルロットはにっこりと微笑んだ。

「さっ！タロウにご飯を作って上げませんと——はひゅっ♥」

太田 太郎。数ヶ月前に弟子にとった少年。

彼の事を思い返した途端、シャルロットの体に異変が起こる。

舌はキスをせがむように口の中に残った生臭い液体を舐め回し、胸はぷるんと震え、乳首がぷっくりと勃起する、オマンコはヒクヒクと物欲しげに蠢いて軽く潮を噴いた。

(えへへ、最初はどのような事かと思いましたが、仲良くなれてよかったですね♥)

そんな体の反応を、タロウと仲良くなれたからだと考えて、シャルロットの笑みは更に深まった。

(元男として男女の関係になるのはありませんが、師匠として、友人として仲良くなれそうで良かった♪……少しだけ警戒させて貰っていましたが結局何もありませんでしたしね！)

少しばかり視線が厭らしい太郎。

そんな彼に悪いとは思いつつ、シャルロットは少し警戒していたのだ。

勿論、警戒用のアイテムを使うなんてレベルの事はしなかったが、己の感覚を研ぎ澄ませて様子を探らせて貰う程度の事はしたのである。

その上で断言できる。

太郎は自分に無体な真似を絶対にしていないと——!!

まあ少し目つきが厭らしい位はご愛嬌。

誠実で真面目だと分かった愛弟子と今日も会うことをシャルロットは楽しみにした。

「いきゅっ♥んう♥少し体が凝っていましたかね？」

そして一度、絶頂して潮吹きをしたのを唯のコリだと認識して、シャルロットは何時もの日常へと歩みだしていった。

第四章…デカマラーと秘密の特訓

静謐たる和室の中、綺麗な姿勢で正座するシャルロットがその容姿に見合った鈴の音の様な声で、目の前で同様に正座する太郎に言葉を投げかけた。

「――タロウ。私は貴方に言わねばならぬ事があります」

「……………」

そう述べるシャルロットの顔に、何時も太郎に接している時のぼわぼわとした穏やかさ無い。

今の彼女は何処までも厳かに。まるで妖魔と相對している時の如く。

そう、シャルロットは限りなく真剣に太郎に語りかけていた。

対する太郎も緊張しているのか、俯き気味で顔の表情が見えにくい。

……もしや、太郎のやっている許されざる淫行が遂にバレたのだろうか？

それならこの態度も納得出来る。

「心を鬼にして、言わせて貰います。――――タロウ貴方に厳しい特訓を受けてもらいます！」

「っ！そ、それはどんな特訓なんですか…………？」

どうも淫行バレした訳ではないらしい。

だとするとこれは些か奇妙だ。

これまで太郎のレベルにしっかりと合わせたトレーニングを行ってきたシャルロットにあるまじき暴挙。

突然の事態にたじろいでいるのか、太郎の声が微かに震えている。

「……とても厳しい訓練です。私自身、聞いただけで震えてしまう程の訓練ですが、敢えて言わせて貰いましょう。よく聞いてくださいね、その特訓の名称は——」

シャルロットはそこで一旦口を閉じた。

自分が言おうとしている特訓の余りの厳しさに、言葉に詰まったからだ。

しかしながら、師匠たる自分は可愛い弟子に、しっかりと範を示さなければならぬ。シャルロットは意を決して、その特訓を太郎に告げた。

「——オマンコズポズポセックストレーニングです!!」

「——ぶほお！」

太郎は吹き出した。

「むっ！タロウ。どうして笑うのですか？私は真面目な話をしているのですよ」

「ご、ごめんなさい。師匠。少し咽ただけなんです」

「そうなんですか？体は大事にして下さいね、タロウ」

「はい。ありがとうございます。それで、師匠。そのトレーニングというのは……」

「ええっ！良いですか、タロウ。そもそもこれは英国のエクソシスト協会の権威、デカマラー氏が提唱した理論『退魔師の実力はセックスの強さと比例する』を元にした由緒正しく、とても信頼できるトレーニング方法です」

「そ、そうなんですか……」

シャルロットは大真面目だ。顔は澄まして。喋る言葉はスラスラと淀みなく。

そこに、冗談や悪ふざけの感情は「ミリたりとも含まれていない。」

因みに太郎の方も真面目な顔をしているのだが、ときおり何かを堪える様に顔を引き攣らせていた。

きっと自分の口から語られた特訓の余りの厳しさに恐れ戦いてしまっているに違いない！とシャルロットの心はずきり、と痛みを覚えた。

しかしながら、ああなんとという事だろう！

私はそんなタロウに更なる苦難を教えなければならぬのだ、とシャルロットは更に心苦しくなる。

「そして、タロウにやって貰いたいのは、その中でも最高クラスに難しく、そして厳しいオマンコズポズポセックストレーニング——!!」

再びシャルロットの口より発せられたトレーニングの名前に、太郎がごくり、と生唾を飲み込んだ。

「その特訓内容は、師匠——タロウの場合は、この私シャルロット||リリーホワイトの、今まで誰にも許したことの無い処女オマンコを♥♥、タロウの雄臭っさいオチンポ様でずぼずぼとほじくりまわし♥♥♥私にだけ泣いて懇願しても、一切躊躇なく犯し続けて♥♥♥そして最後にはタロウ専用のセックスフリーのオナホ妻として人権の全てを捨てさせて♥♥♥野球の試合が出来るくらいの人数の赤ちゃんを妊娠・出産させる事のようにやく完了する修行ですっ♥♥♥」

「……………本当にそれがトレーニングの内容で間違いないんですね、シャル師匠」

「——ええ、そうです。余りにも貴方にとって厳しく険しい内容。思わず疑いたくなる気

持ちは察してなお余りありますが……。しかし、これが真実なのです」

「そう、なんですね……」

——さて。

念のためであっても宣言する必要があるとは欠片も思わないが、それでも一応断言しておこう。

シャルロットの言葉は全くの出鱈目である。

何一つとして真実が入っていない、狼少年ですら裸足で逃げ出す嘘八百。

確かに房中術や魔女の宴サバトなどと言った、男女の性的な交わりを利用して力を高めるような方法は存在する。

存在するが……。だ。それらはもつと真面目な代物である。

まかり間違っても、デカマラーがどうだの、オマンコズポズポセックストレーニングがどうだの、などという頭に蛆が湧いているとしか思えない物ではない。

ならば気になるのは何故シャルロットがそんな出鱈目を述べているのか。

いや、より正確に言うのなら今のシャルロットはその出鱈目を本当のことだと信じてしまっているのであり、それが何故かと言う事だろう。

その説明をするには時を少し遡る必要がある。



——セックスがしたい。セックスがしたい。セックスがしたい。
ここ最近。太郎の頭の中はその考えだけで埋め尽くされてきた。

毎晩、毎夜、シャルロットの寝込みを襲い、その身体を弄び続ける日々。

世の男たちの誰もが羨ましがる夢の様な環境に居ると言うのに、この強欲。しかしながら、多少は致し方ないだろう。

何故なら普通の人間は、中々欲望に歯止めをきかせられないものだ。

一般人からしてみれば、人生を何十回でも遊んで暮らせる程のお金持ちが、しかし脱税をして捕まるなどの事例は枚挙に暇がない。

一つの欲望が叶えば、その次の、それが叶えばまた次の。

人の欲望に際限は無く、ならばこそ太郎はシャルロットと本番セックスを行いたかった。

未だ誰も侵せたことの無い秘密の穴に自分のチンポを突っ込んで、何度も何度も出し入れして、子宮の奥まで犯しつくしたいのだ。

なまじ一度だけなら確実に行えると分かっているのが性質の悪い。

けれども流石にそんな事したらバレてしまうと太郎は思っていて、だからこそその我慢で、フラストレーションだった。

シャルロットとセックスはしたい。

しかしそれが原因で自分のやっている事がバレて今の関係を終わりにしたくない。

ああ！利益だけ得つつ不利益から逃れる方法は無い物だろうかと、どこまでも自分で都合の良い考えに支配される毎日。

しかし当然そんな都合の良い事態が起こる訳は——無い訳でもなかった。

何故なら彼も一応退魔師の端くれ。

強く願えば叶う事はあるのだ。

「これは……。催眠、ですね」

「え、えっ！催眠!？」

指の先を淡く桃色に光らせる自分の弟子の姿に、シャルロットはどこか複雑そうに呟いた。

事の発端は、シャルロットがその凄まじいまでの察知能力（エロ以外に限る）で、太郎が何かしら新しい能力に目覚めていると、当の本人よりも早く気が付いた事だった。

そして「良かったですね、タロウ♪さあ、リラックスして使ってみましょう？」と優しく指導した結果、目の前に差し出されたのがコレであった。

催眠・洗脳能力。人の心を弄ぶ力。

愛弟子が新しい力に目覚めた事は素直に嬉しいシャルロットだったが、しかしその胸中は複雑だった。

「……………まずはおめでとう、タロウ。貴方の頑張りが実った結果ですよ。しかし、人の心を操るのは難しく、また軽々しくやって良い物ではありません。使い方は慎重に、私と一緒にゆっくりと考えて行きましょう」

「……………も、勿論!!軽々しく使ったりしませんよ!!……………ふへへ」

表面上は真面目に答えを返してくれた太郎だが、その瞳に何処か危ない熱が宿っている。

(これは……。良くない兆候ですね……。)

倫理的にどうかこうだ以前の問題として、人の心を操る事の難易度が高く、そして危険な行為であると言うのは方便でも何でもなく、真実なのだ。

如何に新たな能力を取得したからと言って、その強度は結局の所、使用者の実力に左右される。

言ってしまうえばたった今、太郎が入手した催眠能力などまるで大したものではない。

産まれたばかりの赤ん坊にすら効くかどうかすら怪しく、それならまだ千円札を何枚か握りしめて催眠術の技術が書かれた大して信用できない本でも買ったほうが、未だ可能性があるだろう。

そんな張り子の虎を得意気に見せびらかす事の危うさ——幾つもの苦難を乗り越えてきたシャルロットに分からない筈も無かった。

(うーん。一体どうしたものでしょうか……。いえ、此処は逆に考えましょう！)

「そうですね、タロウ。では試しに私に掛けて見ましょうか」

「ええっ?! い、良いんですかつ!!」

「口で難しいと言われても実感は薄いでしょう? 特別に何時も身につけている状態異常対策のアクセサリも全て外します。そうした私に掛けられるのか、試して見て下さい」

(そうして失敗すれば滅多な事を起こす可能性は無くなるでしょう)

シャルロットの心に不安の種は一粒も無かった。

何せ自分の耐性は、催眠や洗脳の類いを一切合切に弾く。

それにそもそも、太郎の催眠の力は本当に弱い。

あんな物に掛かるのは、心の奥底で、誰かに滅茶苦茶にされたがっている救いようの無いド変態マゾ犬くらいの物だ。

「ほ、本当に良いんですねっ……！シャル師匠っ……！」

「二言はありません♪ですが、簡単にかげられると思ったら大間違いですよっ！」

（今日の晩ごはんはタロウの好きなものを作って上げましょう♪）

シャルロットの頭は既に、失敗して落ち込むタロウをどうやって慰めようかと言う事を考えにまで進んでいた。そこに不安は一切なく、自分がここで催眠にかかることなどあり得ないと確信している。

——そして満を持して、太郎の指先から、か細いピンク色の光がシャルロットへ放たれた。

■ 「あうーーー」

「じゃ、シャル師匠？聞いていますか。そ、それとも……。フヒっ。効いてますかっ!?」
3秒後。

そこには全身を弛緩させ、瞳から光を失いながら、赤子の様に呻くシャルロットの姿があった。

「し、師匠？嘘じゃないですよね！？嘘だったら僕、自殺しちゃいますからね……！」

「あうーーー」

「……………あむっ♥れろっ♥」

「あっ♥あっ♥あう〜♥♥」

「や、やった！！本当にかかっているっ！！」

意を決した太郎が、シャルロットの体を抱きしめて唇を奪い、服から手を差し込んで胸を揉みしだいた。

そこまですりでもシャルロットから明確な反応は無い。

これは流石に演技ではあり得ないし、何よりシャルロットがそんな悪趣味な真似をするとは太郎には到底思えなかった。

かかっている。完膚なきまでに催眠にかかっている。

シャルロットの精神の生殺与奪の権利が、自分の手の中にある事を徐々に実感していくたび、比例して太郎のチンポは熱と硬さを帯びていった。

——確かにシャルロットの耐性は催眠や洗脳の一切を弾く。

それどころか現実改変能力による影響ですら彼女に通るかどうかが、怪しい所だ。しかしそれは飽くまでも通常の時の話。

ことエッチな目的を前にした時の彼女の催眠耐性は、紐でくくられたい円玉を雑に揺らされるだけでかかってしまうクソ雑魚ナメクジ級に落ちる。

それでも今まではしっかりと別個に耐性を持つアクセサリを装備していたから問題なかったのだが……。

今回はよりにもよってそれらを全て外してしまった。

太郎にとっては、正に鴨が葱を背負って来た様なものだった。

「とにかくこのチャンスをもにしないと……♡」

「うあーーーーー？」

何としてもこの機会を利用してシャルロットの全てを手に入れたい。

太郎はその一心で、これまでに見てきた催眠モノのエロ本や、やってきたエロゲの内容を思い出し、シャルロットを墮とす為の暗示を考え始めた。

——なお、因みに。

そんなに頭を絞らなくても、全てを捧げろ。とでも言えば、本当に全てを捧げてしまうくらいに、今のシャルロットの催眠耐性は激弱な訳だが。

流石にシャルロットがそこまでクソ雑魚だとは太郎ですら思わず、結果として彼はかなり遠回りをしている形になった。

予想を遥かに上回る。……いや遥かに下回るシャルロットの隠れドマゾっぷりが引き起こした珍事と言えるだろう。

■
催眠…内弟子に対する最も効果的な訓練方法は性的な物である。

催眠…性的なトレーニングは、エッチな行為にノーカウント。

催眠…性的な事柄に対しては、素直に淫語を話す事が淑女としてのマナー。正直に答えろと質問されたら、嘘偽りなく答えなければならない。

催眠…精力が高いほど男は優れていて、そんな雄に屈服するのが雌としての当然の礼儀。

催眠…上記が適用されるのは太田 太郎相手のみで、他の人間にはバレないように行動する。

そして今に至る。

「さあ、タロウ。オマンコズポズポセックストレージング。受けて、下さいますか……？」

欲望に塗れた催眠暗示によって、馬鹿みたいな内容を、シャルロットは大真面目に、そして心配そうに語りかける。

「……分かりました。確かに厳しいけど、シャル師匠のオマンコをずぼずぼ出来る様に、僕。頑張ります！」

「タロウっ！」

（私の弟子は本当に良い子ですね♪こんな厳しい訓練を快く受け入れてくれるなんてっ！！）

シャルロットの顔が弟子の可愛さに綻ぶ。

「でもおっ。少し心配事があるんです……」

「それは、なんででしょうか？聞いてくれれば何でも答えますよ！」

「えっとおっ。シャル師匠わあ、ガチセックスして処女を散らされても良いんですかあゝゝゝ？」

「？」

太郎のその質問に、意味がわからないとシャルロットは首を傾げた。

「何を言っているんですか？勿論、嫌ですよ？タロウが相手だからでは無く、私に殿方とお付き合いする気はありません」

「ええっ。でもおっ、オマンコズポズポセックスさせてくれるんですよえゝゝゝ？」

（ああ、成る程。タロウは少し勘違いしているんですね）

「ふふっ♪タロウ。それは思い違い、と言う物です。良いですか、特訓は飽くまでも特訓。

エッチな行為ではないのです」

「と言うと？」

「特訓で処女を失っても本当に処女が失われる訳ではないですし、特訓で赤ちゃんを産んでも、まさか本当に産んでいる訳では無いんですよ？」

「はえ〜。そうなんですえ〜」

「それに、もうっ！仮にエッチな事だとしたらこんな誘い方をする訳が無いじゃないですか。私は痴女じゃないんですよ？」

「そうですね。ごめんなさい」

「分かってくれれば良いんです。だから、タロウは何も心配せずに、私を雌奴隷にするこ
とだけに集中してくれれば大丈夫です♥」

「はい！僕、頑張ります!!」

「良い返事です」

（タロウは本当に可愛い子ですね♪それでも元男としてエッチな事はさせてあげられませんが、でも特訓では精一杯、淫乱にご奉仕して上げましょう♥♥♥）

シャルロットは弟子との明るい未来に思いを馳せて、思わず顔を綻ばせた。

第五章・雄力測定

「それではタロウ。まず、オマンコズポズポセックストレージングを始めるための検査を行いますよう」

そう話すシャルロットの表情は朗らかな笑顔だ。

今までだって催眠にかかっていた様な物だろうと言われれば、否定は出来ない。けれど、これまでは飽くまでも心の奥底が堕ちていただけで、表面上は普通に過ごせていたのだ。

しかし最早、今のシャルロットは常識すら完全に操られていた。

「検査ですか？」

「はい。雄力測定です。殿方の価値はオチンポの大きさと精力で決まると言うのは、あまりに有名な常識です。そしてオマンコズポズポセックストレージングの対象となるのは平均以上の雄力——Bランク以上の殿方だけなのです。なのでまずはタロウがBランク以上であるのかを測定しなければなりません」

「へえ。それってどうやって測定するんですかあ？」

「ふふっ、簡単ですから安心して下さい♪今回は私がタロウの専属肉穴候補として、エッチなご奉仕をさせて貰いますから♥♥……って、あれ？タロウ、顔が赤くて鼻息が荒いですよ。風邪、でしょうか？それなら特訓はまた今度にしましょうか？？」

話を聞いていく程に、視線は粘っこく、顔は赤く、鼻息が荒くなっていく太郎の様子。

興奮しているのか、体調が悪いのかのどちらかだが、自分の話の内容に興奮する要素なんて欠片も無いのだから、考えられるのは後者しか無い、とシャルロットは名推理を披露した。

「いえっ！その……。雄力測定に向けて興奮しているフリをしてみたんです。だからどうかこのまま続けて下さい!!」

「まあっ！」

口から驚きの言葉が漏れ出ると同時に、シャルロットの心臓は、きゅん♥と甘く跳ね上がった。

(はううっ……。♥♥私の弟子は、なんて健気で可愛らしいのでしょいか♥♥)

「凄いです……。タロウ。そんな訳は無いのに、まるで私の事が性処^オ理^ナ道具^ホにしか見えていないようにすら見える態度です。そうです、その調子！このトレーニングは如何に私を容赦なく犯し尽くすかが重要になりますから！ふふっ♪これなら私がタロウの雌奴隷になる日も近いですね♥♥」

「い、いやあ。そんなぁ……。！」

要はトレーニングを前にしてキッチンとアップをして来た様な物だ。

愛弟子の素晴らしいやる気にして犯る気にシャルロットの喜びは大きくなる。

これが本当に発情しているだけであれば「い、一体何を考えているんですかっ……。!!」と顔を紅くして怒る所だが、飽くまで特訓の準備でしか無い以上、そんなことがある訳も無いのだから。

「それでは、タロウ。私の目の前で早速オチンポを見せて下さい♥♥タロウのやる気に負けないよう、私もしつかりと頑張りますから♪」

「は、はい……!」

「ふふっ、緊張しなくて良いんですよ」

(タロウならきつとBランク以上のオチンポを持っている筈。ああでも、仮にCランク以下だったとしても気落ちしてしまわないように、師匠としてしつかり慰めないと……!)

師匠として、年長者としてどこか余裕のあるシャルロット。

しかしながらそんな余裕は――

ボロン。

「ほへっ???♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

――取り出された太郎のチンポを前に一瞬で壊された。

(えっ……!?!嘘っ♥大つき……♥昔の私の♥倍以上……♥こ、これ本当にオチンポ!?

♥♥♥)

日本人の平均サイズの♥倍強はあろうかと言う太郎のデカチン。

綺麗な正座で座るシャルロットの前に突然現れたそのオチンポは、普通のチンポでは絶対に届かない距離をアツサリと埋め、シャルロットの頬をびたん♥♥と叩いた。

度重なるシャルロットの淫語を前に、既に我慢汁が滲み出っていて、蒸れた汗のニオイと性臭が混ざった雄臭いニオイが、シャルロットの鼻孔を突き貫いた。

「はあっ……!はあっ……!シャル師匠、どうですか!?!僕のチンポっ!!」

「ひゃ、ひゃいっ♡♡♡」

今のシャルロットは催眠によってエッチな感想を隠せない。

それが常識で礼儀だと思っっているため、彼女は顔を真っ赤にしながら如何に太郎のチンポが素晴らしく、自分の雌が刺激されたのかを語りだした。

「え、S級オチンポです……！♡♡♡太くてっ♡♡♡長くてっ♡♡♡固くてっ♡♡♡女を犯して肉オナホにすることだけに特化した雄の象徴っ♡♡♡とってもカリ高で、こんな物でごりゅごりゅされたらと思うと……！♡♡♡はしたなくてごめんなさいっ♡♡♡私さっきからオマンコが反応して下着が濡れてしまっています♡♡♡♡♡」

その言葉に一切の嘘はない。

男にグチャグチャに犯されて屈服したい、という本心に従ってド淫乱に育った肉体と、しかし何処までも澄み渡り綺麗に生まれた鉄の理性。

それによってシャルロットの中で生じていた極めて危ういバランスが、催眠によって完全に破壊されていた。

特訓の中で雌落ちするのは、何も恥ずかしいことではなく、寧ろ相手を歓迎する淑女の証なのだ。

だから、体の素直な反応が止められない。

デカチンビンタを食らって、ビクンビクン♡♡と自分の事を犯したいと脈動するオチンポを視界に入れただけで、シャルロットのオマンコは潮を吹き、濡れて、受け入れ体制を整え始めていた。

「師匠っ……。そんな風に褒めてくれるなんて嬉しいです……。っ！」

「ま、まだですっっ♥♥♥評価のポイントは大きさだけじゃないですからっっ♥♥♥雌を犯し尽くせる能力が優れているか、もっと一杯調べないと♥♥♥♥♥」

「あひいっ♥♥♥師匠っ！そんなことしたらっ……。っ！」

シャルロットの手が、白い指が。

自発的には、男の手をすら殆ど握ったことのない汚れなきその部分が、躊躇なく太郎の汚いチンポを握りしめていた。

そしてしゅっ♥♥♥しゅっ♥♥♥と擦り始めて、肉棒に刺激を与え始めた。

「さあっ♥♥♥いっぱいザーメン精液だして下さいっ♥♥♥雌私を孕ませたいって♥♥♥ドロドロの子種をぶっかけて下さいっ♥♥♥♥♥」

「あ、あ、あっ♥♥♥師匠、手コキうますぎっ……。っ！」

無辜の人々を守るために磨かれたシャルロットの超感覚が、全て雄のチンポを悦ばせるためだけに使われる。

我慢汁でヌメったオチンポのより感じやすい部分を的確に刺激していく様は、まるで太郎専用の人力オナホ。

事務的ではなくリズムカルに刺激を変え、ときおり玉袋なども触れて快感に慣れさせない。

しかも無理やり寝込みを襲うのと、(催眠とは言え)相手の意志で自発的に奉仕されるのとは快樂の桁が違う。

とつくのとうに興奮しきったチンポで我慢するなど、到底無理な話だった。

「おうっ♥射精っっ！射精すっ！師匠っ！シャル師匠うっくくく！！」

「ひゃんっ♥♥♥」

どぴゅどぴゅどぴゅくくく♥♥♥と太郎のオチンポから勢い良くザーメンが噴出する。

ドロドロとしたそれは、シャルロットのシミ一つ無い綺麗な顔面に、欲望のままに精液パックとして塗りたくられた。

しかしシャルロットは嫌がる素振りを見せもせず、あろうことか唇の周りに付いた精液をぺろり♥と妖しく舐め取り、嚙下した。

「はううつっ…♥♥♥す、凄いつ♥♥なんて凄いやーめんっ♥♥量も、濃さも並の男とは大違いっ♥♥♥」

「ああっ、師匠。舐め取ってくれるなんてっ！」

この場合の並の男とは、前世の自分の事だ。

男として完全に負けた敗北感と、雌として屈服する高揚感が合わさって、シャルロットの脳みそがグチャグチャにかき乱される。

（く、悔しくてっ♥♥嬉しくって♥♥私、何も分かんないっ♥♥♥これっ、頭おかしくなるっ…♥♥♥）

しかしどれだけ混乱せども、シャルロットは動く。

これまで積み上げてきた善性は、シャルロットをいかなる時でも他者の幸せのために動ける、天使に変えている。

……最も、催眠によって認識がずらされた現在、シャルロットが今やるべき善行とは太郎に性的な奉仕をすることなのだが。

「凄いですっ、タロウ♥♥♥もう雄として最高クラスなのは確実っっ♥♥♥でも検査は最後までキチンと行わないとっっ♥♥♥」

「まだ、こんな嬉し……じゃなかった。厳しい検査があるんですか!?!」

「ああっ♥♥♥そんなに怯えないで、タロウ♥♥♥せめて一杯愉しんで貰えるように、私頑張っご奉仕しますからっ♥♥♥あむっ♥♥♥」

「おほっ♥♥♥今度はチンポを呑み込んでっ♥♥♥」

次のシャルロットの行動は、未だ精液の残り汁で汚れた太郎のオチンポを自らの口の中に含むことだった。

ちゅぱちゅぱ♥♥♥と亀頭に吸い付き、尿道に残った精液を丹念に吸い出してお掃除していく。

「回復りよふもっ♥♥♥検ひゃ対ひょう♥♥♥れふからっ♥♥♥わたひのお口でっ♥♥♥おひんぽっ♥♥♥元気にもどひてっくらはいっ♥♥♥」

「大丈夫ですっ、性欲には自信がありますからっ!ああっ、そんな事言ってる内にもう興奮してきました……!」

「うひよっ♥♥♥もうっ♥♥♥あふっ♥♥♥しゅごひいっ♥♥♥」

シャルロットの生暖かいお口の中で、太郎のチンポがむくむくっ!♥♥♥と硬さを取り

戻す。

驚異的な回復速度に、シャルロットの目が点になった。

「シャル師匠うゝ。そのままっ……!!そのまま口でしてっ……!!」

「もひろんでふっ♥♥しっはり私の口のはっ♥♥射^だしてくらはいっ♥♥」

(おっきすぎて♥♥顎っっ♥♥外れちゃうっ♥♥でもタロウの為に頑張らなきゃっ♥♥♥)

太郎の規格外のデカチンがシャルロットの小さな口の中を暴れまわる。

しかしながらそんな状況で合っても、シャルロットは健気に自分の事より太郎の気持ち良さを優先する。

しかも、シャルロット自身は無自覚だが、彼女の口は度重なる睡姦調教により、とつくに太郎専用に堕ちている。

ベロが大蛇の様に蠢めいてチンポの全体を自由自在に刺激し、その間にもバキュームのような吸い込みで快楽を畳み掛ける。



「どうれふかつ♡♡タロウっ♡♡きもひいいれふかつ♡♡」

「ああっ…♡♡凄いです♡♡シャル師匠っ♡♡気持ち良いしっ、なによりっ…！！そのひよっところ顔がエロすぎっ…！！♡」

「あふっ♡うれひっ♡♡」

デカすぎるチンポを無理やり含んでいる為、シャルロットの端正な顔はマヌケなひよっところ顔に歪んでいた。

しかしその無様さは、只々興奮を増加させるスパイスでしかなく、太郎の性感は高まるばかりであった。

なんて贅沢な状況。

しかし太郎はまだ満足していなかった。

あろうことか彼は、シャルロットの後頭部を、その脂ぎった両手でガシッ、と掴んで、前後に振り出したではないか！

「シャル師匠っ！もっ…！！もっ…！！もっ…！！もっ…！！もっ…！！もっ…！！」

「おごっ♡♡おごおおおっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

（これっ♡♡苦しっ♡♡息っ♡♡出来なっ♡♡でもっ♡♡タロウのオチンポっ♡♡傷つけないようにしないと♡♡）

モノ扱いは正にこの事。

シャルロットの口内は勿論、喉の奥までにも太郎のデカチンが高速で出し入れされる。嘗て無い衝撃がシャルロットの口の中に溢れ、苦しさ、それによって発生したマゾ牝快楽がシャルロットの脊髄を貫く。

「し、師匠。ご、ごめんなさいっ……!」

なんとか意識を取り戻して再び座っているシャルロットに対し、太郎はしきりに恐縮していた。

シャルロットの何か考え込んでいる様子に、流石にやりすぎたか……?と思ったのだ。

「タロウ……」

「な、なんですかっ!？」

その時、シャルロットの体がバツ!と素早く動いた。

太郎などでは到底反応すら出来ず、彼の体はシャルロットに惹き寄せられた。

「ひいっ!ごめんなさい——あれ?」

「よしよし♪そんなに怖がらなくて良いんですよ♥よく出来ましたね、とても偉くてカッコ良かったですよ♥♥」

お仕置きされる……!と身構えた太郎。

しかし彼に与えられたのは、シャルロットに抱きしめられ、その顔をシャルロットの爆乳に埋められながら、頭を撫でられるという至福の時間だった。

「〜度目の射精だと言うのに量も、濃さも素晴らしかったです♥♥それになにより最後の、私を自分の性欲を満たすためだけの性処理道具にしか思っていない行動っ♥♥あれがとても素晴らしい♥♥うんうん、ああやってどんどん私をタロウ専用のオナホールに墮としていきましようね♥♥」

「あっ、師匠っ。胸が当たってますっ……!ふへへっ」

「ふふっ♥良いんですよっ、タロウっ♥♥これまではエッチな事になってしまっ為、過剰なスキンシップは取れませんでした、特訓中はノーカウントですからっ♥♥いくっばい甘えさせて上げられます♥♥ほら、タロウは私のおっぱいチラチラ見るの大好きでしたよ♥♥良いんですよ、これからは♥♥好きだけ、見て♥♥好きだけ触って♥♥」

「良いんですか！ホントのホントに良いんですかっ……！」

「勿論♪タロウの事は一杯甘えさせて上げたいですし、それに測定途中ではありませんが、もう雌の体を好きに触って良いSSランクは確実……！♥♥だから何時でもどんな時でも、私のおっぱいや、オマンコを弄って良いんですからね♥♥」

「はあっ……！それじゃあ遠慮なく」

宣言通り遠慮なく太郎の指が、可愛らしいワンピースの上からシャルロットの爆乳を揉みしだく。

「ひゃんっ♥んんっ♥♥でもっ、まだ検査は残っていますから♥♥今はっ、んひいっ♥♥だ、ダメですっ♥♥話を聞いて下さいっ♥♥あひゅっ♥♥そんな、揉むのに夢中で♥♥ほひよっ♥♥も、もうっ♥♥後少しだけっ♥♥∞時間位だけですからねっ♥♥」

昼下がりの居間の中、太郎の興奮した鼻息と、シャルロットの喘ぎ声が響き渡った。

第六章…内弟子（淫）

「それでは次の測定を始めますよ」

結局あの後、〇時間ほどスキンシップ（意味深）を取り、頭上に合った筈の太陽が沈んだ後、シャルロットがそう切り出した。

「ふひっ、次はどんな事をするんですか」

「今度行う測定は、先ほどよりも過激で陰しい物となっています」

「さつきよりも過激……」

「ええ。そうなんです」

シャルロットは少し顔をこわばらせて緊張し、太郎は鼻の頭を膨らませて興奮した。

同じ話をしていると言うのに、両者の反応はまるで正反対である。

「ですから、無理だと思ったなら何時でも言ってください。貴方はまだ若く、経験もまだ浅い。ここで無理をしすぎる意味はありません」

「――師匠。僕は頑張りますよ！この試練を乗り越えて、シャル師匠の弟子として相応しい男になります！ふひっ!!」

「タロウ♥♥♥」

意気揚々と気合の入った声を上げた太郎に、シャルロットが発情した雌猫の声を上げる。

普通の人間が見れば、発情した猿か、餌を貪っている豚にしか見えないタロウの態度だが、今のシャルロットにとっては、厳しい訓練に勇気をもって望む男らしい態度だ。

精神による歯止めが利かなくなったシャルロットの肉体が、余りにも簡単に反応し、股をきゅんっ♥と泣かせて、下着をぐしょ濡れに変えていた。

「そこまでの覚悟があるのでしたら、止めるのは逆に失礼になりますね。ならば、説明させて貰います。良いですか？」

「はい。勿論です!!」

やる気ならぬ犯る気に満ち溢れた太郎の返答に、シャルロットの笑みは深くなる。

「良い返事です♪——タロウ、貴方にはこれより真なる内弟子になって貰います」

「真なる内弟子？それは一体……」

「良いですか、まず先ほどの測定により貴方は見事、女を犯し、屈服させ、蹂躪し尽くす資格がある事を証明しました。しかしそれは飽くまでも平常時での話！これより求められるのは常在戦場の心得なのです！」

「えっと……。どんな状況でも高いパフォーマンスを發揮できなければならないって感じですか？」

「その通り！いつ如何なる場合でも、女を犯す欲望を保てるのか。それが次の測定
の焦点となります」

「でもそれと内弟子に一体何の関連性が……」

「ふふっ。そう慌てないでください、タロウ。普通の内弟子を考えてわからないのは当然です。何故ならあれは、距離が遠い」

「距離が？」

「ええ。」つ屋根の下とは言いますが、パーソナルスペースはしかと区切られていますか

ら」

それでは駄目なのです、とシャルロットは言葉を続ける。

「内弟子は昔、その名を淫弟子と呼ばれていました。性別の異なる男女の師弟が、極めて近く——お風呂も寝る時も一緒に過ごし、互いの体を開発しあっていた事が由来です」

勿論、そんな事実は無いです。

無い、が……、今のシャルロットの脳内においてはそれが厳然たる真実であり、また、特に可笑しな事でも無い物なのだ。

「そしてタロウにはこれより、その淫弟子になって貰います」

「そ、それって……！」

ある程度の方向性——内弟子の特訓はエッチな内容——を暗示しただけで、どんなことをするのかは分かっていない為、驚いている太郎に対してシャルロットは悪戯げに微笑んだ。

「とりあえず、まずは一緒に入りましょうか——お風呂♪」

次なる淫らな特訓が始まった。

「ふーっ……！ふーっ……！し、師匠って結構セクシーな下着を履いていますよねっ」
脱衣所にて、シャルロットの無自覚ストリップに興奮しながら、太郎はそんな言葉を発した。

それは下着泥棒や、寝込みを襲ったりした時から感じていた疑問だった。

表着は清楚なワンピースなどを好んで着ているシャルロットだが、その中に着用する

下着はどこもなくエッチな代物が多かった。

たった今、太郎に借しげも無く晒されている赤い下着もそうで、複雑な模様の編まれたレースのそれは、綺麗ではあるが下の肌を少し透かしていて、下品という程ではないが、性的な魅力を際立たせる物だった。

「そうですね。誰に見せるものでもないですし、特に気にしていませんでしたが、よくよく思い返してみれば、そう言った傾向の物を好んでオーダーメイドしていたかも知れません。……………はしたないでしょうか？」

少し恥ずかしげに問いかけてくるシャルロットに、太郎はぶんぶんと首を横に振った。

「そんな事無いですよ！〜！とてもエッチで、今にも犯したくなる魅力的な格好です!!」

「も、もうっ、タロウったらっ♡♡お世辞が過ぎますっ♪……………そ、そんなに言ってくれるならもう少しだけエッチな物も着てみようかしら」

「是非そうするべきだと思います!! 師匠のエッチな魅力、もっともって見てみたいです……………! よければ僕が、もっと過激な下着や、首輪やアナル尻尾、乳首・クリリングなんかプレゼントしますよっ……………!」

「そ、そう言うのは好きな女の子に上げないと駄目ですよっ……………♡♡♡」

「だからシャル師匠にプレゼントするんです!!」

「師匠をからかっては駄目ですっ!」

「ええ〜っ。からかってなんか無いです。それにあれ? 師匠、おパンツが濡れていますよ? 本当は欲しいんじゃないんですかあ?」

「っう~~~~~~~~♥♥♥ううっ……♥その、そんなコトばかり言う口はこうです!!」

「んもっ!」

シャルロットが、その類まれなる身体能力を無駄に活かし、太郎の唇を己の唇で素早く奪った。

驚く太郎の口の中を、シャルロットの可愛らしい舌が愛願する^{あいがん}ように動き回り、求愛する。

「んっ♥♥ちゅぽっ♥♥はひゅっ♥♥しゅきっ♥♥じゅぞゅ♥♥ひゃふっ♥♥れるろっ♥♥♥——ぷはあっ♥♥♥」

「し、師匠っ……♥」

「お、思い知りましたか……!師匠の事をからかいすぎる悪い口はこうなるんですからね♥♥♥次、同じことをしたら、もっと長く、もっと過激にやってしまいますからね……!!」

「分かりました!もっと素直に本心を言っていきたいと思えます!!」

「だから、もうっ♥♥………………うう、タロウに褒められると全身が信じられないほど気持ちよくなっちゃうのにっ♥♥♥」

「何か言いましたか、シャル師匠?」

「何も言っていないせん……!さ、さあっ、いつまでもこうしていないで次の測定を始めま

すよ……!!」

「は〜い」

■ 普段は貯めているばかりのお金を、しかし大量に使って作られた豪勢な檜風呂がある浴室の中、シャルロットが太郎の体を丁寧に洗っていた。

タオルなどをあまり使わず、その柔らかくすべすべとした、手と体を使って甲斐甲斐しく汚れを洗うその様は、どうみても師匠と言う上位者では無く、泡姫や、飼われた性奴隷のそれだったが、行っているシャルロット自体はとても嬉し気に、なんなら鼻歌交じりで奉仕していた。

「加減はどうですか？タロウ」

「あふん、はふっ。凄い良いです師匠っ……!!まるで極楽に居るみたいですよっ」

「それは良かったです♥」

石鹸をまるでローションの様に塗りたくったシャルロットの爆乳がふにゅん♥ふにゅん♥と体に押し当てられる度に、太郎の口から情けない声が漏れ出る。

(はうっ♥タロウ、可愛い♥♥)

100人聞けば、6人は気持ち悪がるであろう声に、しかし残りの一人であるシャルロットは胸を高鳴らせ、必要もなく背中におっぱいを押し付けていた。

催眠前は、無自覚の本心はどうであれ、他者に性的に見られないように楚々としていたシャルロットが、しかし今は如何にタロウに口を思っ貫えるかを基準に動いていた。

「師匠っ。此処も洗ってほしいですよ……!!」

そういつて太郎が指したのは己の一物。

何故なら、これだけ性的に洗ってくれているシャルロットだと言うのに、その部分だけは執拗に避けていたからである。

図々しいにも程があるお願いだが、しかしシャルロットはくすり、と笑みを浮かべた。「そうですね。そろそろ良いでしょう。まずは他の部分の汚れを落としてっ、と。では、色々と用意してきたので少し待っていてくださいね」

「？」

シャワーで軽く太郎と自分の体を流した後、シャルロットは脱衣所に行き、そこからある物を持ってきた。

それはお風呂用のエアマットと、枕であった。

「さ、これの上に仰向けで寝てください」

「えっと、分かりました」

イマイチ何をされようとしているのか分かっていない様子の太郎に、シャルロットは自らの意図を説明しだした。

「先にも言いましたが、今回の測定の目的はどんな状態でも雌を犯す欲望を保てるかどうかを調べることに。そのためにタロウには、本来一人で落ち着けるはずの入浴を私と共にし、他者の手で体を洗われると言う苦行に陥らせて貰いました。此処までされれば、常人ならばあまりの辛さに欲望を保てないものでしょう。しかし……」

そこまで言って、シャルロットは寝そべるタロウのオチンポへ目を向けた。

それは熱く固くそそり勃ち、天井に向かって自分は臨戦態勢だと宣言し続けていた。

「僕なら全然大丈夫です♥♥早くシャル師匠のオマンコをズポズポしたくて仕方がないです♥」

最低の宣言に、しかしシャルロットは余りに恍惚とした雌の顔を浮かべた。

「ホントに、本当に素敵です、タロウ♥♥んちゅっ♥♥」

「あひいっ!」

そしてシャルロットは愛おしげにタロウのチンポにキスを交わした後、説明を続けた。

「もう殆ど合格ですが、最後にその逞しいオチンポの姿が虚仮威しで無い事を、私に証明して下さい。では、始めましょうか……!!♥♥」

「おほっ……!!」

その次にシャルロットが取ったこと行動に、太郎は今日一の気持ち悪い声を上げた。

何故ならシャルロットが始めたのがその爆乳でチンポを挟み込み擦り上げる——パイズリだったからだ。

「シャル師匠のパイズリ……!!」

「ひゃんっ♥♥あっ♥♥凄いや♥♥まだおつきくなって♥♥ビクンビクンって♥♥」

これまたどこで用意してきたのか、シャルロットはひんやりと冷たいローションオイルを胸の谷間に流し込み、挟んだオチンポをじゅぽっ♥♥にゆるっ♥♥と匠に擦り上げる。

「だってシャル師匠にパイズリなんかされたら我慢がっ!」

「ふふっ♥♥タロウは私のおっぱい見るの大好きですものね♥♥♥♥」



シャルロットはどこもかしこも男の目を惹きつける美少女だが、中でも一番に目立つのは周囲に過剰なまでのセックスアピールを繰り返す、その爆乳だ。

同棲を初めて以降、太郎がその魅惑のバストをチラチラと盗み見た回数は数え切れない。

最初は優しく苦言を呈していたシャルロットだが、催眠にかかって以降は、寧ろ積極的に露出して、見せつけて上げていた。

「師匠のおっぱいがエ過ぎるのがイケないんです……！一体、どれだけサイズがあるんですか、このドスケベバストっ!!」

「106です♪」

「ひゃくっ……！」

そりゃあデカイ訳だ、と納得と驚愕の入り混じった太郎の声が浴槽に響き渡る。

「本当は殿方からエな目で見られるのが嫌で、こんな雌牛の様に育ったお乳は嫌だったんですが、こうやってまるで性的ではない事柄でタロウの役に立ってる様になった今は、ドスケベおっぱいに育って良かったと思います。んっしょ♥よいしょっ♥♥」

「そんな、素振りっ。おほっ、乳圧すっげ……！見せなかつたですけど、シャル師匠っ、胸、大きいのっ、気にしてたんですね！」

「だって皆さん隠してはいるんですけど、誰でもエッチな目で見てくるんですけど。それは本能的な行動で、仕方がない事だとは分かっていますが、少し辟易してしまいます」

「はあっ、気持ち良っ……！エな目で見られるのは嫌なんですかあ？」

「勿論です！これまでも、これからも、私がそう言った姿を殿方に見せることは無いと思

います」

「ふーん。あっ、師匠っ、もっと乳首を良く見せて下さいっ」

「あっ♥気が利かなくてごめんなさい♥♥んにゅっ♥はいっ♥これで良いですかっ♥♥私の乳首♥♥良く見て下さいねっ♥♥」

「ぶひっ、すっごい眺め……!こんな色っぽい体してたら、周りから色々と言われたんじやないですかっ?」

太郎のその言葉に、シャルロットは過去を思い出し、ぷくり、と可愛らしく頬を膨らませた。

「最近はそんな事まるでありませんが、……まあ退魔師の中にも下品な方は居ますから多少は。流石に、男に媚びる体だの、男に犯される為に産まれた女だの言われた時は、物申しましたが!」

「はえ、そんな酷い事を言う奴がいるんですね。おふっ♥イキそ〜♥それにしてもシャル師匠のおっぱい、こんなに大きくて柔らかいのに、張りも弾力も凄いですよね。まるで全身が男に媚びていて、犯される為に産まれて来たようなものですよ♥♥」

「も、もうっ♥♥そんなに褒められると照れてしまいます……♥♥」

自分の言葉のちぐはぐさを、シャルロットは理解出来ない。

シャルロットにとって、太郎からに限っては最悪のセクハラが、最高の賞賛に書き換えられているのだ。

「ふひひっ。本心ですから。それより師匠っ、乳首がさつきよりもぷっくりとしてきてますよ♥♥もしかしてパイズリしているだけで、感じて来ちゃったんですか〜?」

「そ、それはっ……」

(は、恥ずかしい……♥♥)

顔を真っ赤にして言いよどむシャルロット。

しかしながら、彼女の中から感想を言わないと言う選択肢は消されている。

内なる心の声に素直にさせられている今のシャルロットは、如何に自分が情けない雌豚なのか、隠すことが一切出来ないのだ。

太郎の途轍もない巨根を、自分の途轍もない爆乳でくにゅりっ♥くにゅりっ♥♥♥と隠し、擦りながら、シャルロットは自分の体の状況を正直に実況し始める。

「そ、その通りです……♥♥ひゃうっ♥♥実はお風呂の前っ♥♥♥タロウに触られた続けた時からっ♥♥♥私のおっぱい♥♥♥訳が分からない程♥♥♥敏感になっちゃてるんですっ♥♥♥」

「へえー、そうだったんですね。ぐふっ♥♥」

「ホントは♥♥♥おほおっ♥♥♥イグッ♥♥♥こんな風に何度もイッてるんをっ♥♥♥平気なフリしてたんですっ♥♥♥なのにつ♥♥♥タロウが感想を求めちゃうからっ♥♥♥」

「はひひっ、それはごめんなさいシャル師匠っ。だけどお、それは何も恥ずかしい事じゃ無いから僕には正直に言って良いんですよっ」

「そうですけど、お♥♥♥でもでもっ♥♥♥師匠だからっ♥♥♥タロウにカッコ良い所見せたいんですっ……♥♥♥」

「ぶひっ、それは嬉しいですけどお、僕は師匠のカッコ良い所よりエッチな所の方が見た

いな〜」

「ううっ♥♥♥♥♥本当ですかっ?♥♥♥♥♥」

「マジです、マジい」

「そ、それじゃあっ……!♥♥♥♥♥」

「うおっ!?!」

その瞬間、太郎のチンポに与えられている快感が跳ね上がった。

先ほどまででも十二分に気持ち良かったが、今のぎゅううううううううっ♥♥♥♥♥と爆乳の形が淫猥に変わるほどの圧力で行われるパイズリの気持ち良さは、桁違った。

柔らかさと反発力と言う相反する特徴を持って行われるそれはさながら人間搾精機。

正しく男に犯されるためだけに特化して、成長ならぬ性長をしてきたシャルロットによる妙技だった。

「ごめっ♥♥♥♥♥ひよほっ♥♥♥♥♥ごめんなさいっ♥♥♥♥♥ホントはもっど出来たのにっ♥♥♥♥♥体が可笑しくのなるのがっ♥♥♥♥♥これっイグツ♥♥♥♥♥怖くてっ♥♥♥♥♥お、お、っ♥♥♥♥♥加減してましたっ♥♥♥♥♥いきゅっ♥♥♥♥♥何も変なことじゃないのにっ♥♥♥♥♥なのにつ♥♥♥♥♥熱々オチンポっ♥♥♥♥♥当たつてるとっ♥♥♥♥♥おほおっ♥♥♥♥♥体変になっちゃうっ♥♥♥♥♥戻れなくなるのぉっ♥♥♥♥♥」

あるいはそれは、表側からは催眠で、内側からは無自覚の願望で。

無茶苦茶にぐちゃぐちゃに、玩具にされているシャルロットの表層人格の、些細な抵抗だったのかも知れない。

勿論、何の意味も無く潰された訳だが。

「ぶひよっ！こ、これやばっ……！が、我慢が出来ないっ」
半端ないデカ乳が上♥下♥上♥下♥と動き回る快感。

そして何より、女の側はさして気持ちよくなる筈ではないパイズリで、ガチイキアクメを晒しているシャルロットの、情けない雌豚さが快樂への最高のスパイスだった。

「射精すよっ、師匠っ………！」

「はひっ♥♥私もっ♥♥一緒につっ♥♥♥♥」

「おっ、おっ、おっ♥射るっ!!」

「いきゅううううっ♥♥♥♥」

爆乳の間に目一杯のザーメンを吐き出す太郎。

そのザーメンに反応して、さらなる雌落ちアクメを晒してしまうシャルロット。

〜人の情けない声が浴室の中に響き渡った。



「んむっ♥ちゅっ♥ごめんなさいね、タロウ。先程は私、どうかしていました。特訓によってタロウ専用のどんな時でもイキ散らす、人間以下の雌オナホになることなんて当然で、喜ぶことなのに、それを恐れてしまうなんて……。師匠としてあるまじき失態でした……。はむっ♥ちゅううう♥♥」

「ぶひよっ♥♥れろろっ♥♥良いんですよ、師匠。何でも無いことなのにちよっ怖くなるくらい、誰にでもありますからっ。ずぞぞぞっ♥♥はあく師匠の口、美味っ………！」

「タロウっっ♥♥♥」

広い浴槽の中、十分に距離を取れるスペースがあるというのに、人々は体を寄せ合い、絡みつき、抱き合いながら睦み合っていた。

そこに先ほど見せた躊躇なんて欠片もなく、アツサリ蟻の様に踏み潰されて消えていた。

「それよりい、師匠うゝ。特訓の結果はどうでしたあ？」

「そ、そうでしたね。合格も、合格っ。大合格ですっ。タロウは、私のような救いようのない雌豚を犯して、犯して、犯して、犯し抜けられるSSSランクの最高の雄ですっ♥♥」

「それじゃあっ……！」

「はいっ、お風呂を出たら最終試験——ガチセックス実習を始めます♪」

「ふひひっ……！」

遂にシャルロットが、終わる始まる、その時がやって来た。

第七章…オマンコズポズポセックストレーニング

夜10時。

太陽の光など当に無く、僅かに差し込む月光と、オレンジ色の常夜灯だけが光源の薄暗い和風の寝室の中で、太郎の不満気な声が響き渡った。

「ええっ、セックスさせてくれないってどういうことですかっ！」

その原因は、寝室に入るなり我慢しきれず襲い掛かろうとした太郎を、シャルロットが制した事であった。

しかしそれは貴方の勘違いだ、とシャルロットは慌てずに自らの意図を説明しだした。「慌てないで下さい、タロウ。飽くまで事を始める前にする準備があると言うだけの話です」

「準備ですかあ？」

「ええ。勿論ここに来てオマンコズポズポセックストレーニングを行わないなどと言う選択肢はありません。タロウにはそのつよつよオチンポ様で、私の恥ずかしい処女オマンコを使用済みにして精液をコキ捨てて貰います♥♥」

「ふひっ、安心しましたよおっ」

「しかし、これは極めて重大で神聖なる特訓。行う前には互いのコンディションを最高に高めなければなりません」

「ええと、それじゃあどうするんですかあ？」

「くすっ♪こうするんです♥♥」

「おっほっ……!!❤️」

喋りながら寝巻を脱ぎ捨てたシャルロットの姿に、太郎の気色悪い声が漏れ出る。

元より何処か扇情的なネグリジェ姿であったが、やはり産まれたままの姿には叶わない。

新雪の如き白い肌が、月明かりに晒されて光り輝くその様は、生々しく淫猥で、そして幻想的だった。

これを好きに出来るなんて!と太郎のチンポが更に固くなったのも無理はないだろう。

「今日」日であれだけ射精^{だし}たのにこの元気さ❤️❤️タロウは本当に凄いですね。ですがそれでも、まるで消耗が無いと言う訳では無いでしょう?」

「それは、まあ……。そうですね」

如何に無駄に性欲に溢れる太郎とて、日に10発以上も射^だしていけば、流石に全く消耗が無いとは言えない。

「オマンコズポズポセックストレーニングは、非常に厳しい訓練。行うのなら万全の状態——私の子宮を一発で屈服させて妊娠確定させられるような特濃ザーメンが放てる状態であるべきです❤️❤️」

「ふへへっ」

シャルロットの言葉に、孕んだ彼女の姿を妄想して、太郎が空気に絡みつくような声を上げる。

そんな気色の悪い光景を、しかし微笑まし気にみながら、シャルロットは説明を続けた。

「なので！今、丁度夜の二〇時ですから、日付が変わるまでの〇時間。布団の中で裸のままお互いに抱き合い、絡み合い、睦み合い、〇人の性感を高め合いましょ♡♡」

「ぶひっ！分かりました。それならそうと早く言ってくれば良かったのに♡」
ここに来て数時間のおあずけは厳しい所だが、しかしラブラブな恋人の様にイチャツけると言うのは悪く無い。

太郎は二つ返事で快諾した。

「もうっ！最初からそう言う気でした！やる気があるのは良い事ですが、少し慌てすぎですよ、タロウ」

「ふひひっ。サーセン」

「ふふっ、わかってくれればいいのです♪」

どう考えても反省していない太郎をアツサリと許すシャルロット。

シャルロットの太郎に対する態度は、もはや策を通り越して、底が抜け落ちていた。



「んちゅっ♡♡ちゅぱっ♡♡いきゅっ♡♡どうですか♡♡たろうう♡♡気持ち良くなれていますか♡♡♡♡」

「んむっ♡れろろっ♡勿論ですよ、シャル師匠う♡」

「それは良かった♡♡♡♡♡♡♡♡」

絡み合っている、愛し合っている、睦み合っている。

元々は一人用の狭い布団の中、全裸の二人組の男女が、互いの体を絡みつけ合いながら愛を確かめ合っている。

それは美女と野獣ならぬ、美少女と豚。

釣り合いなど欠片も取れていないが、しかしより激しく相手の事を気持ち良くしようと動いているのは美少女——シャルロットの側だった。

「ひゃん♥♥♥はひゅっ♥♥♥♥♥タロウと抱き合うのっ♥♥♥♥♥気持ちいいっ♥♥♥♥♥」

「ああ、可愛いよ、シャル師匠。師匠っ♥♥♥」

互いの唾液を交換し合いながら、シャルロットの豊満すぎる爆乳が、タロウのぶくぶく太った体に押し当てられる。

そのお返しとばかりに、太郎の勃起デカチンがシャルロットの下腹部、丁度下に子宮がある辺りの肌に擦りつけられる。

チンポが興奮によって夥しい我慢汁で溢れている所為で、穢れ無きシャルロットの肌がぬめぬめとした雄の欲望汁で汚されていく。

そんな汚らしい行動が、しかし今のシャルロットにはとてつもなく気持ちが良い。



られ続けたシャルロットの肉体は、最早太郎の玩具同然だった。

何もしていない時は至って普通だと言うのに、太郎にエッチなことをされた瞬間に、感じる快樂の値が数百倍、数千倍、あるいはそれ以上に跳ね上がる。

耐えることなど到底不可能。

寧ろ余りの快樂に発狂死していない事がシャルロットの強さを表しているような物だった。

「それじゃあ折角だから、もっとイカせて上げますね！ほらっ！ほらほらっ!!」

「ほひよっっ♥♥♥はひっ♥♥♥おっ♥♥♥おっ♥♥♥いきゅっ♥♥♥いっちやう♥♥♥いきますっ♥♥♥これすきっ♥♥♥おほおおおっ♥♥♥♥♥」

「ああっ。シャル師匠のドスケベサウンドすっげ。いくら聞いてても飽きないですよ」

「おほっっ♥♥♥お褒め頂きっっ♥♥♥いくっ♥♥♥ありがとうございませゅっ♥♥♥♥♥」

それから一時間程、寝室の中にシャルロットの獣染みた嬌声が響き渡った。

一体、どれほどイカされたか。少なくとも1000は下るまい。

常の凛々しい姿などどこにもなく、今この部屋にいるのは、雌豚と豚だけだった。

「うん。シャル師匠のアへ声、もつと聞いていたけれど。これ以上聞いていたら射精しちゃいそうですよおっ♥♥♥師匠の言う通り、今溜まっている精液は全部オマンコの中に注ぎたいしい。仕方がないから、お話ししましょうよ、師匠うん。お・は・な・し」

「ほっ♥♥♥ほひよっ♥♥♥はっ♥♥♥ほおっ♥♥♥はひっ♥♥♥おはなひっ?♥♥♥♥♥わ、わかりまひたっ♥♥♥おはなひしましゅ♥♥♥♥♥」

全身が快楽により痙攣して何度も絶頂を繰り返し、オマンコから幾度と潮を吹き散らしている。

とても話など出来るコンディションでは無かったが、愛しい弟子からの要望だ。ご主人様

太郎からの責めが和らいだこともあって、未だ表情は蕩け快楽の残滓で何度もイクような状態では合ったが、シャルロットはどうにか平静を取り戻した。

「それにしても、お風呂での話に似ていますけど。シャル師匠ってホント美人ですよねえ。凄く男にモテてるんじゃないですかあ？」

「そ、そんな事は、あんっ♥いきゅっ♥こ、こほんっ！そんな事は無いですよ……？」

「ええり。嘘だあっつ。ホントの事言ってくださいいよおり」

(あうっ………。そう言われたら、本当の事を言わなくっちゃ……。)

「え、えと。その……。確かに、そう言ったお話を頂いた事はあります」

「ほら、やっぱり！それで、一体どのくらい告白された事があるんですかあ？」

「う……。その、ごめんなさい。数え切れません……」

「えええっ。やっぱりモテモテじゃないですかあ」

「ううっ……」

シャルロットはモテる。

見目麗しく性格も良い上に、命が危ないところを救われた吊り橋効果を受けた男が何千、何万といるのだ。それはもうモテる。

告白・求婚された回数は数知れず、アイドルでも無いのにファンクラブなんて代物すら

ある。

正しく、退魔師界のスーパーヒロイン。

……最も今は太郎専用の雌マンコでしか無いが。

因みに、上手いこと弟子に収まった太郎に対するやっかみの声は数知れないが、そういった物は全て、シャルロット本人が抑え込んでいる。

それでこの様とは、恩を仇で返されたと言うべきか、それとも本当の願望を叶える恩返しをしてくれたかと言うべきかは、判断に窮する所だ。

「それじゃあ彼氏とかは居たことあるんですか？」

「いえ、そういった話をお受けしたことは一度もありません」

「そうなんですね！それじゃあキスとかも一回もしたことない感じですか？」

「あむっ♡ちゅっ♡ちゅるるっ♡♡あっ！タロウ、歯磨きが甘いですよ。少し夕飯の食べ残しが残っています。……ええと、ごめんさい。キスでしたっけ？」一回も無いですね」

「おほっ！すみません。でもお、どうせ師匠がラブラブキスで口の中お掃除してくれるから、どうでも良いって思っちゃってえ」

「もうっ、タロウは甘えん坊さんですね♡♡んちゅっ♡♡れろろっ♡♡んひゅっ♡♡はひよっ♡♡ずぞぞっ♡♡ぷはあっ♡♡うん、これで綺麗になりましたね♪」

「ぶひひっ。ありがとございませす。それじゃあ冨な事とかもしたことない感じですか？ぶっちゃけ、処女ですよね♡？」

「ええ。一度も無いですし、きつとこれから無いと——おっほおおおっつっつ♡♡♡♡♡た、タロウっ♡♡い、いきなり乳首を引っ張られるとっ♡♡ひんっ♡♡お話

できませんよおっ♥♥♥

「ふひひ、サーセン」

「もうっ♥♥とにかく、殿方と口な事をした事は一切ありませんし、ずっと処女の前定です！特に今はタロウとガチハメセックスすることに忙しいので口なことなんかしている余裕はありません！」

「流石、シャル師匠♥♥それにしてもお、もしかして師匠って男の事、嫌いなんですかあ？」

「うっ……………」

そうとられても仕方が無い発言をした自覚のあるシャルロットは、バツの悪そうな声を上げた。

「そんなことは無いんですよ…………？友人は沢山居ますし、接するのは寧ろ殿方の方が気安いくらいです。ただ、その…………。恋人や夫婦めおとと言った関係になることに抵抗があるのは事実です…………。代わりに女性の方が対象という訳でも無いんですけどね…………」

「ええええ。残念だなあ。シャル師匠には僕の奥さんになって欲しかったのにい」

「ほひよっつ…………!!?!?!?!ひゃんっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

(はうううっ、なんか凄いだキドキしてっつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥)

告白やプロポーズを受けた回数は、それこそ星の数ほどある。

その一度たりとも了承した事は無く、断る事に対する罪悪感も覚えども、それ以外に心を動かされた事は無いシャルロット。

ましてや、今の太郎の言葉など冗談めいている上に気持ち悪く、これまでで「心」を争う程に最低な物だ。

だと言うのに、彼女の心と体は今までにない程に、劇的な反応を示していた。

頭の中に幸福な感情が溢れ出て、頬が勝手にほころんでしまうのを止められない。

心臓がきゅんっ♥と脈打って、体温が上昇する。

全身に甘い痺れが迸り、深い絶頂と浅い絶頂の波が交互に来て、その上体が勝手に排卵を始めて子宮が下りて来た。

完全完璧になんの疑いようもなく、シャルロットの肉体は太郎を受け入れていた。

(でもでもでもっ……！断らないと、私は本当は男なんだから、ううっ……！)

心がズキリと痛み、半ば泣きそうになりながらも、シャルロットはなんとか断りの文句を口に出した。

「ごめんなさいっ……。そう言って頂けるのは凄く嬉しいんですが、どうしても殿方とそう言った関係になる気になれないんです。だからタロウの奥さんにはなれません……」

「そっかー、残念だな」

「で、でもっ……！」

「んん？」

「もしも私のこの考えに折り合いがついて、タロウがまだ同じ気持ちでいてくれたなら、その時はいいの一番にお受けさせて貰ってもいいですか？その……。わ、私もタロウの事は……す、好きですから♥♥」

「それは嬉しいなあ。その時を待っていますねえ」

「は、はい……♥♥なので、この話は一旦終わりにしませんか！そ、そのっ、とても恥ずかしいので……」

「ええり。シャル師匠の恥ずかしがっている顔、可愛いからもっと見たいのにな」

「可愛っ……！♥だ、駄目ですっ。そんな事言っても終わりですっ……！そ、それにほらっ！今は、タロウのオナホ妻になって人権の全てを差し上げて、赤ちゃんを孕ませて貰うことに集中しないとイケませんからっ！」

「ぶひっ！そうですねっ！シャル師匠に奥さんになって貰えないのは残念だけど、代わりに365日、何時でもガチハメおつけいなオナホ妻になって貰って、どちゅどちゅ出し決めまくって、沢山赤ちゃんを産ませられるように頑張りますね！」

「はい、期待しています。……そ、そのっ。それが終わったら、あの。エッチな事は駄目ですけど、一緒に手を繋いで、デートくらいは……♥」

それこそまるで初心な少女の様に。

シャルロットはとても恥ずかしげに呟いた。

「ひひっ、楽しみにしてますねえ。そうだ！なら、もし今日。上手くガチハメセックス出来たら、訓練じゃないキスして下さいよ！」

「キっ……！だからエッチなのは駄目だっ言ってるのに」

「そんな事言わずに、お願いですよお、師匠うっ」

「ううっ。……」

「え？なんだって。聞こえなかったんで、もっとハッキリ言っして下さい!!」

「つつつ〜〜〜！だから、タロウが上手く生ハメセックス出来たら、そのご褒美にキスをします！こ、これで満足ですか……！……うう、恥ずかしい」

「ふひひ、さーせん」

「だからもうっ、あんまりからかわないで下さいっ。……ファーストキス、なんですからね」

「はい。あ、それと喉乾いたんで、師匠の唾液貰います。じゅるるっ♡美味っ♡♡宝級美少女の唾液、おいしく♡♡」

「あ、はい。ちゅっ♡♡れろっ♡♡はむっ♡♡いきゅっ♡♡ぷはあっ♡♡とにかく！女の子のファーストキスを賭けるんですから、タロウもこの後、がんばって下さいね！」

「は〜い。努力します。ひひっ」

そんな風に、催眠で常識が滅茶苦茶になったシャルロットに対する、太郎の悪趣味な会

話が続き、遂に時間が――始まり終わりの時間がやってきた。

■ 「それでは、最後の試験。ガチハメ実習を始めましょうか」

「待ってました！もうチンポがビンビンで待ちきれないですよ!!」

「ふふっ、やる気で良いことです♪ですが、もう少しだけ待って下さいね、礼儀作法はキチンとやっておかねばなりませんから」

「礼儀作法？」

シャルロットは態々一度、布団の中から這い出して、畳の上に全裸で正座した。

そしてそのまま太郎の方を向き三指をついて、老舗旅館の若女将の様な見事な礼を見せる。

「この度は、私、シャルロット||リリーホワイトのお高くとまった処女マンコを、タロウ様のぶっといカリ高オチンポでぶち抜いて頂きたく存じ上げます♥♥どうか私のオマンコを無料の精液便所と思って頂き、思う存分に精液をコキ捨てて下さいませ♥♥♥♥♥」

「おほっ♥さすが師匠、礼儀に満ちあふれてますねっ」

「オチンポ様をハメて頂く、人型オナホとしては当然の嗜みですから♥♥♥それでは、タロウ、仰向けに寝て下さい」

「はあっ……！はあっ……！シャル師匠からの筆おろし……！」

こんな時だけは行動の早い太郎が、早速ごろん、と布団の上に仰向けで寝転がった。

日本人男性の平均を遥かに上回るエグいデカチンが、もう我慢しきれないとばかりに、天井に向かって起立している。

シャルロットは、その剛直に跨るように体の位置を移動した。

「愛撫は……要りませんか？」

「はいっ！もう爆発しそうです！！」

「うふふ、それはいけませんねっ。ザーメンはきっちり私のオマンコの中に出してくれないと♥♥♥では——」

妖しげに微笑んだシャルロットは、自らの濡れに濡れたオマンコを、太郎のオチンポに押し当てた。

そのままピッチリと綺麗に閉じた割れ目に、チンポを挿入していく。

期待に震える亀頭がオマンコに食べられ、そしてそのまま――

「え？シャル師匠？？？？？」

――そのまま挿入しようとした寸前に、シャルロットがいきなりこてん、と倒れた。当然、チンポも抜けてしまい太郎の間の抜けた声が寝室の中に響く。

そして。

「ごめん……なさい。やっぱり……今日は、止めさせて、下さいっ……！」
シャルロットがいきなりそんな事を言い出した。